

43087

教科書文庫

4

8/0

32-1940

2000302342

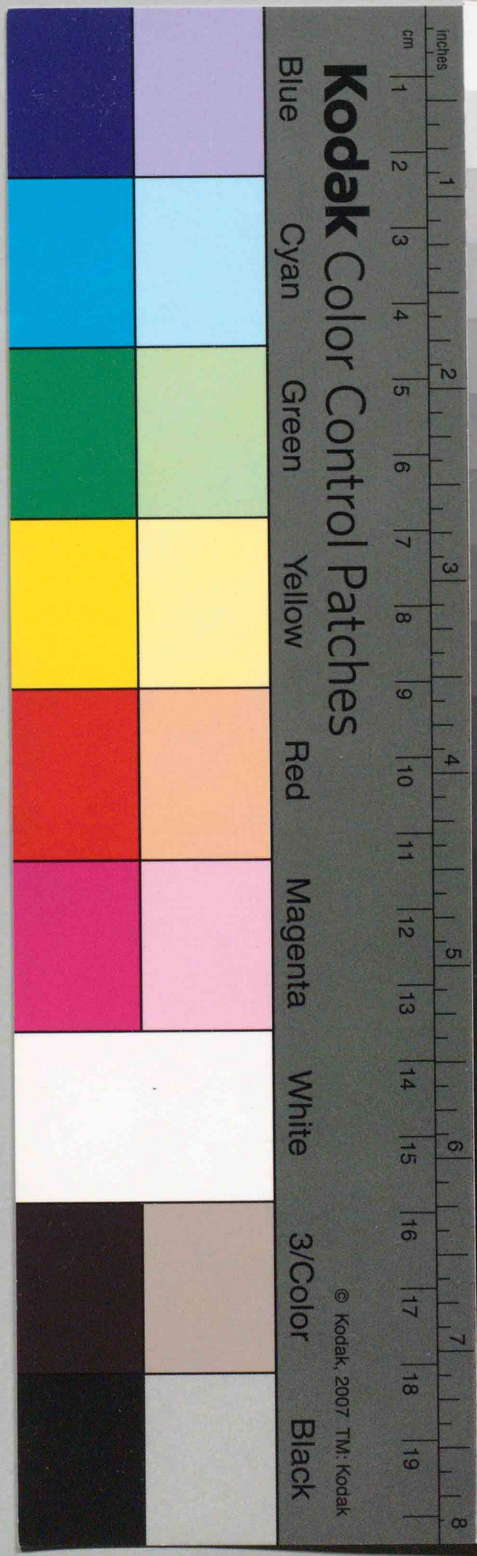
Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches



© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Mo14
資料室

高等小學讀本 卷二

文部省



3759
M018



文部省

高等小學讀本

卷二

元勉強



昭和十七年

十二月七日

月曜

目録

第一課	農業	一	第十六課	年頭の十日	六十六
第二課	堀田瑞松	四	第十七課	都會と田舎	七十二
第三課	月の光	八	第十八課	上毛の三山	七十五
第四課	鎮守に詣でて	十	第十九課	日光の杉並木	七十九
第五課	社會奉仕の精神	十二	第二十課	日光山	八十三
第六課	護國の目と腕	十七	第二十一課	一年の折々	八十五
第七課	猫の垣巡	二十四	第二十二課	かんにん	八十八
第八課	ビスマークの幼時	三十	第二十三課	村上義光	九十
第九課	鯨釣	三十六	第二十四課	海苔	九十六
第十課	保険	四十四	第二十五課	福澤諭吉	百五
第十一課	人を紹介する手紙	四十九	第二十六課	人形を贈る	百九
第十二課	エジプトの遺蹟	五十	第二十七課	故郷の花	百十二
第十三課	マルコ、ポーロ	五十五	第二十八課	鳥の翼と昆蟲の翅	百十六
第十四課	植物と氣象	六十一	第二十九課	奉天附近の大會戰	百十九
第十五課	俳句	六十五	第三十課	學校園	百二十九
			第三十一課	世界の望	百三十二

高讀二

高等小學讀本 卷二

第一課 農業

農業はあらゆる職業の中で、最も身體を健康にするものである。世の中には、日の目も見ずに仕事場で働く者もあれば、一步も机邊を離れないで、事務に忙殺される者もあるが、農業に従事する者は、終日すがくしい大氣を吸ひ、快い日光を浴びながら、労働する。人世に於てこれほど人の健康に適する職業が他にあらうてあらうか。

身體の健康に適する農業は、又よく精神を健全にする。

第一課 農業

農業によつて先づ養はれる徳は、着實であり、勤勉である。如何にあせつてみたところで、昨日植ゑた苗が今日實のるものではない。或男が、田植の翌日から毎朝稲を少しづつ引張つて、早く成長させようとしたら、やがて枯れてしまつたといふ笑ひ話もある。一足飛は農業の禁物である。しかも唯自然に任せて氣長く待つてゐるばかりで、作物は出来るものではない。人力の限を盡くして始めて自然に任せる、そこに自ら勤勉着實の美風も養はれるのである。

農業は最もよく家庭の和樂を與へるものである。耕すにも、種を蒔くにも、肥料を施すにも、除草するにも、一家

總出て働くから、家内各自が其の職業を理解し、隨つて彼等の間に美しい同情の念が起る。夕飯の膳に向ふ時、互に慰め合ふことの出来る彼等は、一日の勞苦をこゝろに忘れて、一家一心の妙趣を十分に味はふことが出来る。

農業は最も趣味に富んだ職業である。終日自然を友として働いてゐる農夫は、又忠實な自然の觀察者である。しかも彼等は唯傍觀的に自然を楽しむ風流者ではない。深い同情の念とあらゆる辛苦とを以て、木を植ゑ、田畑を耕す。其の勞作によつて、山は愈、其の美を發揮し、野は益、其の趣を添へる。

斯く觀じ來れば、農業は實に堅實にして幸福な職業である。

第二課 堀田瑞松

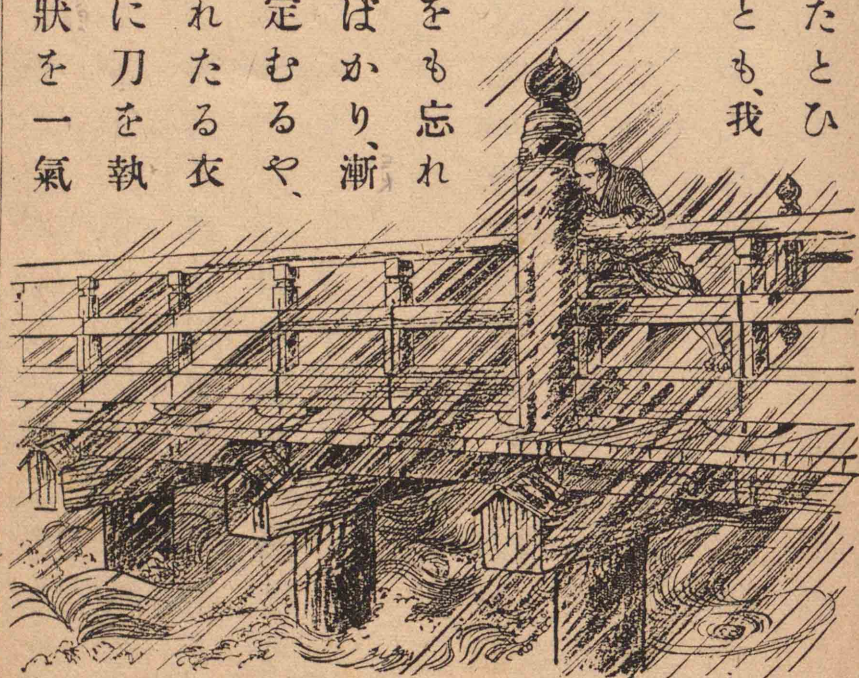
堀田瑞松は彫刻鐵筆をもて聞えたる人なり。久しく京都御所の御用を務めけるが、或時、數多き人々の中より選ばれて、水晶の置物を載する臺を作れとの命をかうむりぬ。

瑞松此の名譽ある御詠を拜して、思案に思案を重ねたる末、其の置物が數個の水晶なれば、臺も水に縁ある波の形こそよけれとて、うづまく波の間より、此處彼處に水晶の浮かび出でたる如くせんと工夫せり。されど波

の形たるや、千狀萬態、或は集り或は散じ、或は飛騰し或は落下し、變幻出沒極りなきものなれば、居ながらにして其の妙趣を捕らへんことは容易の業にあらず、如かず、實物に接して自然の姿態を寫さんにはと、或は須磨明石の海岸を傳ひ、或は鳴門の瀬戸に船を浮かべて、ひたすら心にかなふ波の形を見んと力めたり。されども遂に發見すること能はず、煩悶數日にわたりぬ。折しも京都大いに雨降り、河水氾濫し、橋落ち家流る、慘狀を呈せり。瑞松心に思ふ節やありけん、家人のとむるをもきかず、盆を覆す猛雨を衝きて、三條の大橋へと急ぎ行けり。

さて瑞松は一もくさんに馳せて橋上に至らんとせしに、此の時橋は既に危く、今にも落ちんばかりなりければ、警戒の者はいつかな其の通行を許さず。されど技に熱心なる瑞松は、さばかりの事に志をくじくものにあらず、御所の御用を務むる某といふ者なり。御用のため、命に懸けても、此の橋上より、うづまく波の有様を調ぶる必要あり。此の儀特に許さるべし。とて、強ひて其の許を得、雄々しくも橋の中央に進み、欄干に倚りて一心不亂に水面を眺めたり。斯かる中にも、風益加り、雨愈烈しく、遂には橋げたもゆらくと浮動し始めぬ。警戒の者どもは此の有様に、危しく、疾く逃げよ。としきりに

注意したれども、瑞松は、たとひ身は水中の藻屑となるとも、我が心になふ波状を見極めざる上は、一步も退かじとて、呼べど叫べど、少しも動かさず。身の危きをも忘れて見つむること一時間ばかり、漸くこれぞと思ふ形を見定むるや、急ぎ我が家へ馳歸り、ぬれたる衣服を脱ぎもやらずに直ちに刀を執り、記憶に新なる波濤の状を一氣



に刻み上げぬ。それより瑞松は之を見本として、更に十
數日を費し、壯麗なる置物臺を作りて之を御所に納め
けるに、**叡感殊**に斜ならず、從來は自ら謙遜して寸松と
號せしを、以後瑞松と稱すべしとの御詔をさへ賜はり
たり。

瑞松常に人にいひて曰く、我はかつて人に師事せしこ
となし。我が師は即ち自然なり。**造物**の妙趣、之を採りて
以て我が有となすべきのみ」と。(和田垣謙三、兎糞録ニ據ル)

第三課 月の光

月の光は温和で、日光のやうに強烈ではない。日は赫々
として仰いで見ることも出來ないが、月は眺めて親し

み易い。太陽が一度出れば、善悪美醜悉く照破されるが、
月は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の分別を失はせて
しまふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱
を伴はない清涼の光である。休息安靜の夜に最もふ
さはしい此の光に對しては、誰しも人生の慰藉を感じず
る。詩的情緒は油然として湧く。晝の間は猛獸と闘つて
ゐる熱帯の野蠻人でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘
れる。熱國の椰子の陰、寒地の氷の家、眺める人の心々は
違ふであらうが、月光の人心にしみ渡ることは、恰も其
の影の千草の露の玉毎に宿るやうなものである。
うち向ふ月は一つの影ながら

浮かぶは千々の思なりけり

東西古今、憂愁苦悶種々の思は、幾萬回となく、幾億回となく、此の光に向つて訴へられた。之を讚歎し、之を吟詠した詩歌の感吟は、世界各國の文學に満ちくゝてゐる。天文學者はいふ、月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である。此の冷たい光が、古往今來どれ程の暖みを人間に與へたか、又與へつゝあるか。月は永久に人間の良友である。(芳賀矢一、月雪花ニ據ル)

第四課 鎮守に詣でて

一

荒野拓きて

村を起しし

祖先の遺業

多かる中に、

先づこそ仰げ、

村の鎮めと

いつきまつれる

鎮守の宮居。

二

鳥居くゞりて

登る石段、

一足毎に

心さわやぎ、

鈴を鳴らして

かしはでうてば、

神々しくも

こだまに響く。

三

神の御ほこと

社頭に高き

杉の大木を

仰ぎて立てば、

此の木植ゑけん 昔の人の
心さながら 心に通ふ。

四

代々を重ねて 榮行く村の
鎮めといます 神の御前に、
いでや、誠の 心捧げて、
祖先に恥ぢぬ 勳たてん。

第五課 社會奉仕の精神

人は孤立して單獨に生活し得るものにあらず。一の社會をなして共同生活を營むにあらざれば、其の安寧と幸福とは得て望むべからず。共同生活を營む上に於て

最も尊ぶべきは、己の利益を犠牲ぎげいとしても、公共の福利を増進するの精神なり。之を稱して社會奉仕の精神といふ。

社會の福利を増進せんがためには、吾人の爲すべき所甚だ多しといへども、其の第一歩は、互に他人に迷惑をかけざるにあり。道路を行くには必ず左側を歩むが如き、集會・面會の時間を嚴守するが如き、道路・河水に汚物を棄てざるが如き、皆是なり。次には公共物を大切にすべし。神社・佛閣・公園・共同井戸・共同便所等一般公衆の爲に存する物は、よく其の存在の目的を解して、つとめて之を保護し、かりそめにも破壊し、又は汚損するが如き

ことあるべからず。尙進んでは他人の利便をはかるべし。汽車汽船電車等の中にて、老人小兒などの座席なくして當惑せるときは、直ちに席を譲り、道路に往來の妨となるべき石塊木片等の散らされたるときは、之を片附くるなど、日常容易になし得らるゝこと、數ふるに暇なかるべし。

英國少年義勇團の綱領に曰く、

團員は他人を助け、他人に對して有用なるべし。

自己の快樂は勿論、其の安全を犠牲にすとも、他人に對して有用ならんことを期せざるべからず。若し事に當りて處置に迷はば、先づ他人の利害如何

を考へ、他人の利益を増進するの途を選ぶべし。常に他の危急を救ひ、傷病者を助くるの用意なかるべからず。毎日必ず他人のため一の善事を爲さざるべからず。

と。他日りつばなる國民とならんとする者は、少時より常に此の意氣精神を持せざるべからず。

進歩したる社會に於ては、社會と個人との關係密接にして、公益は私益と不離の關係を有す。公益をはかるは即ち私益をはかる所以なり。而して公益をはかるの第一歩は、各、自己の職業を通して社會に貢獻するにあり。職業は個人が社會の活動の一部を分擔して社會の繁

榮を致すの道なれば、各自責任を以て之に當らざるべからず。もし職業を以て己一個の利慾をほし、いまゝにするの手段となさんか、社會は各自の職業のために、却つて其の幸福と安寧とを破壊せらるゝに至るべし。吾人は己の職業によりて社會に貢獻すると共に、社會の福利の増進を直接の目的とする社會事業を尊び、之を助けて其の發展をはからざるべからず。即ち學校圖書館・病院・養老院・孤兒院等に對しては、皆出來得る限り之を援助するの心掛肝要なり。

凡そ文明國の國民たる者は、よく共同生活の眞意義を會得し、日常の生活の上に、各自の職業の中に、常に崇高なる奉仕の精神をこめて社會に盡くし、變に臨みては一身を犠牲にして敢へて顧みざるの信念を持せざるべからず。

第六課 護國の目と腕

昔ローマがまだ方十數里の一小國であつた頃、今のローマ市の中央を流れてゐるチベル川の西には、別にエトルリヤといふ國があつて、二國の間には殆ど戦争が絶えなかつた。西暦紀元前五百年頃、エトルリヤにポルセナといふ英雄が出て、ローマを討平げようと企てて、急にチベル川まで押寄せた。ローマの方では、敵に橋を渡られては、たちどころに占領せられるおそれがある

ので、上を下への大騒であつた。
時にローマにホラチウスといふ拔群の勇士があつた。
僅かに二人の部下を引連れ、川向ふの橋のたもとに立
つて、死力を盡くして敵軍をくひ止めてゐたが、多勢に
無勢で、とても支へきれない。

「我々が防いでゐる間に、急いで橋を切落せ。早くく。」
と叫んで、三人は盾を左に、槍を右に、こゝを先途と防ぎ
戦つてゐる。こちらは急ぎに急いで橋を切つて、すはと
言へば、直に落せる用意が出来た。

「そら、落ちるぞ。早く引返せ。」
と後から聲を限りに呼ぶ。ホラチウスは

「早く歸れ。もう一人で防げる。急げく。」

と二人をせきたてて、唯一人矢表に立つた。二人がやつ
と橋を渡つたと思ふと、すさまじい響と共に橋は忽ち
落ちた。此の響を聞いて、ホラチウスは先づローマは大
丈夫だと安心した。なほも槍先をゆるめず防ぎ戦ひな
がら、一步々々にしさつて、川岸に來たと思つた時、忽ち
ひらめく敵の一槍に左の目を刺された。もうこれまで
と、真先に進んだ騎馬武者目がけて、手にした槍を投げ
つけ、重い鎧を着たまゝ、どんぶと川に飛込んだ。敵も味
方も驚いて、一せいに水の面を見てゐると、暫くして川
の中流に浮上つた。もはや敵の投槍も及ばない。其のま

ま拔手を切つて、此方の岸に泳ぎ着いた。ローマ市民歡喜の聲は天地に響いた。彼方の岸でも聲を放つて歎稱した。

此の時一人のホラチウスが無かつたならば、世界最大の帝國となつたローマも、二葉の芽生で摘取られたかも知れなかつた。それから後、誰が言始めたともなく、獨眼ホラチウスの名は天下に響き渡つた。ローマ市民は、此の愛國の英雄のために壯大な銅像を建てて、永く其の大都を飾つた。

ホラチウスの非凡の働で、一時ローマは滅亡の悲運から救はれたけれども、ポルセナ王は必ずローマを滅さ

うと決心し、其の後又兵を進めて、十重二十重に之を圍んだ。市民は糧食も次第に減少して、今は餓死するばかりになつた。

こゝに又一人、稀代の勇士が現れた。これはホラチウスと共に、ローマ史上一對の勇士として語り傳へられてゐるムキウスである。ムキウスはポルセナ王を一刺にしてくれようと、短劍を懷にして其の陣屋に忍び入つた。陣屋の内では、一人の男が並居る兵士に俸給を渡してゐた。見るとりつばな身なりをしてゐるので、ムキウスはこれこそ王に違ひがないと、飛びかゝつて其の男を刺通した。が、これは王ではなくて、重臣の一人であつ

た。刺客は忽ち捕縛されて、王の前へ引出された。王は非常に怒つて、焼殺してしまへ。」と命じた。火は忽ち用意された。ムキウスは

「ローマ武士の膽力を見よ。先づこれから焼かせてやらう。」

と言ひざま、右腕を烈火の中に差込んだ。腕はじり／＼燃出したが、ムキウスは自若としてゐる。さすがの王も其の不敵に、吞まれて、

「もう焼くに及ばぬ。あゝ、あつばれな勇士だ。敵ながらもお前のやうな勇士は殺すに忍びない。歸れ。」と彼をゆるした。

鬼をもひしぐと見えたムキウスは、此の言葉を聞くと、忽ち形を改め、丁寧な態度に變つた。

「陛下の寛大な御一言は身にしみて、烈火の責よりも苦しう存じます。御言葉にあまえて、命は頂戴して歸ります。が、こゝに一言陛下の御爲に申し上げて置きます。陛下の首を戴かうと決心した同志の者は、三百人程もあります。私は其の先驅を試みて、運拙くてこんな目を見ました。今後とてもゆめ／＼御油斷あつてはなりません。」

ポルセナ王は、こんな決死の義士三百人に附けねらはれてはたまらないと思つて、自ら進んでローマと和議

を締結し、圍を解いて去つた。こゝに於てローマの市民は始めて枕を高くして眠ることが出来た。これ以來、左ムキウスのあだなは武士の手本を意味するやうになつた。

大ローマ帝國の礎は、實に左の目一つと右の腕一本で置かれたのである。

第七課 猫の垣巡

主人の庭は三方竹垣を以てしきられてゐる。正面は八九間もあらう。左右は雙方共四間に過ぎぬ。我が輩のいはゆる垣巡といふ運動は、此の垣の上を落ちないやうに一周することである。これはやり損ふこともまゝあ

るが、首尾よく行くとお慰になる。殊に處々に根を焼いた丸太が立つてゐるから、ちよつと休息に便宜がある。今日は出来がよかつたので、朝から晝までに三べんやつてみたが、やる度にうまくなる。うまくなる度におもしろくなる。四へん目に半分程巡りかけたら、隣の屋根から鳥が三羽飛んで来て、一間ばかり向ふに列を正して止つた。これは無禮をやつた。人の運動の妨をする。殊に何處の鳥だか籍もない分際で、人の垣へ止るといふ法があるものかと思つたから、通るんだ。おい、のき給へ。と聲をかけた。眞先の鳥はこちらを見て、にや／＼笑つてゐる。次のは庭を眺めてゐる。三羽目は嘴を垣根の竹

でふいてゐる。何か食つて来たに違ひない。
我が輩は返答を待つために、彼等に三分間の猶豫を與へて、垣の上に立つてゐた。鳥は通稱を勘左衛門といふさうだが、なるほど感じの悪いやつだ。我が輩がいくら待つてゐても、あいさつもしなければ、飛びもしない。我が輩は仕方がないから、そろ／＼歩き出した。すると真先の勘左衛門がちよいと羽を廣げた。やつと我が輩の威光に恐れて逃げるなと思つたら、右向から左向に姿勢をかへただけである。地面の上なら其の分に捨置くのではないが、如何せん、たゞさへ骨の折れる道中に、勘左衛門などを相手にしてゐる餘裕がない。といつて又

立止つて、三羽が立ちのくのを待つのもいやだ。第一さう待つてゐては足がつゝかない。先方は羽のある身分であるから、こんな處には止りつけてゐる。随つて氣に入れば何時までも逗留するだらう。こつちはこれで四へん目だ。たゞさへ大分つかれてゐる。況や綱渡りにも劣らざる藝當兼運動をやるのだ。何等の障碍物がなく、てさへ落ちぬとは保證が出来ないのに、こんな黒装束が三つも前途をさへぎつては、容易ならざる不都合だ。いよくとなれば、自ら運動を中止して、垣根を下りるより仕方がない。めんだうだからいつそさやう仕らうか。敵は大勢のことではあるし、殊には此の邊には見馴

れぬ人體である。嘴がおつにとがつて、何だか天狗の申子のやうだ。どうせたちのよいやつではないにきまつてゐる。退却が安全だらう。餘り深入をして萬一落ちてでもしたら、なほさら恥辱だと思つてゐると、左向けをした鳥が「あはう」と言つた。次のもまねをして「あはう」と言つた。最後のやつは御丁寧にも「あはうく」と二聲叫んだ。

如何に温厚なる我が輩でも、これは看過出来ない。第一自己の邸内で鳥輩に侮辱されたとあつては、我が輩の名前にかゝはる。決して退却は出来ない。諺にも鳥合の衆といふから、三羽だつて存外弱いかも知れない。進め

るだけ進めと度胸をすゑて、のそく、歩き出す。鳥は知らぬ顔をして、何かお互に話をしてゐる様子だ。愈かんしやくに障る。垣根の幅がもう五六寸もあつたら、ひどい目にあはせてやるのだが、残念な事には、いくらおこつてもものそく、としか歩かれない。

漸くのこと、先方を去ること約五六寸の距離まで来て、もう一息だと思ふと、勘左衛門は申し合はせたやうに、いきなり羽ばたきをして一二尺飛上つた。其の風が突然我が輩の顔を吹いた時、はつと思つたら、ついふみ外してすくとんと落ちた。これはしくじつたと垣根の下から見上げると、三羽共元の處に止つて、上から嘴を揃へ

て、我が輩の顔を見下してゐる。つぶといやつだ。にらめつけてやつたが、一向きかない。背を圓くして少々うなつたが、やつぱりだめだ。

考へてみると無理のないことだ。我が輩は今まで彼等を猫として取扱つてゐた。それが悪い。猫なら此のくらゐやれば確にこたへるのだが、あやにく相手は鳥だ。鳥の勘公とあつてみれば致方がない。機を見るに敏なる我が輩は、到底だめだと見て取つたから、きれいさつぱりと縁側へ引上げた。（夏目金之助吾輩は猫であるニ據ル）

第八課 ビスマークの幼時

ドイツ帝國建設の大政治家として英名世界にかくれ

文 語 体 傳 記 文

なきオットー、フォン、ビスマークは、ドイツの片田舎なる貴族の家に生まれたり。其の家庭は頗る嚴格にして、彼は幼き頃より決して他の貴族の子弟の如き優長なる生活を許されざりき。六歳の時、母は彼をベルリンに送り、某氏の家塾に入らしめしが、其の家塾の教育は全くスパルタ流にして、過激なるまでに體育を施せり。

塾生は毎朝六時に起床し、七時には教場に入らざるべからず。朝食はもとより、晝食、夕食何れも粗末なるもののみなり。しかのみならず、我が前に置かれたる食物を餘す時には、他人の食終るまでは皿を捧げて卓前に立たざるべからずといふ制裁ありき。嚴格なる家庭に成

長せりとはいへ、貴族の子にて、僅かに六歳の幼童なれば、塾長は、ビスマークの果して之に堪へ得るか否かを疑ひしが、彼は誠實に師の命令を守り、年長故參の友と相伍して、よく塾生たるの本分を盡くせり。

やがて夏となりて、游泳の始るべき時は來れり。教師は新しき生徒を一度水中に投入れて、水になれしむるを



例とせり。今しも游泳處と定められたる川の兩岸には、塾生と教師と相並びて立てり。教師はビスマークを捕らへて水中に投ぜり。不敵なる小童は、一旦深

く水中に沈みしが、暫くして前岸近く現れ、平然として岸に上れり。人々相顧みて語なく、皆其の大膽なるに驚けりとか。是よりビスマークの名塾中に高く、彼は遂に一方の首領として仰がるゝに至れり。

教場に於ける彼は、其の明敏なること等輩をしのぎ、往教師をして感歎せしめたり。殊に世界歴史を好み、ギリシヤ・ローマの古英雄の傳記は其の最も愛讀せしところにして、孤燈の下、獨り史書に對して種々の空想にふけり、やがては自ら史中の人たらんことを思ひ、夜更くるをも知らざりしことしばしくなりき。

十二歳の時中學に轉じ、こゝにてボンネルといふ歴史

科教師に愛せられ、朝に夕に其の居を訪ひて、一層深く歴史の研究に心を委ねたり。彼は平生の粗暴なるに似ず、書を読みては常に寢食を忘れてたりしが、此の少壯時の勉學こそ、思へば彼が一世の偉業を大成せし基なりしか。たとへ天賦の才ありとも、磨かざば玉も瓦石に等しからん。ビスマークが常人に超えたる才能を以て、尙刻苦勉勵して讀書に熱中せし一事は、我等の深く鑑みるべきことにあらずや。

プロシヤの首相としてオーストリアと戦端を開き、僅かに數旬にしてこれを屈服せしめ、勳威赫々としてベルリンに凱旋するや、舊師ボンネルは當時ベルリンの或學校の校長なりしが、此の報に接して歡喜に堪へず、直ちにビスマークを訪ひ、辭を改めて其の偉勳を稱揚し、閣下よ、余は閣下がかつて其の愛讀せられたる世界歴史の中に、今日は自ら壯絶なる一節を記入せられたるを祝す。といへば、ビスマークは深く其の舊恩を謝し、靜かに答へて、否、先生稱揚の辭は我の敢へて當る所にあらず。されど多年の素志こゝに遂げて、歴史研究の効果の空しからざりしを喜ぶ。といひたりとぞ。此の英雄を養成したる舊師の喜は如何。又其の素志を遂げしビスマークの愉快は如何。此の物語を聞く我等も心のをどるを禁ずる能はざるなり。

第九課 鰐釣

叙景文

良い時候だ。陸の方から北風がひやり／＼海面を撫でて、船底をたたく程のゆるやかな波を立ててゐる。鱗形の雲が、天心から東南の方にかけて、銀色の波を大空のみどりにうたせてゐる。海は其の影を浮かべてゆらめいてゐる。富士江の島足柄箱根眞鶴崎伊豆の天城山は、西日の光にはつきりと際立ち、左の方を見ると、近くて葉山、遠くて三崎、三浦半島は縦に短く走つて、天城と三崎の中程には、伊豆の大島がほのかに見える。白帆が其處此處に五つ六つ。大島の方角に、點のやうに一の字のやうに見えるのは、鰐を釣る船であらう。名島の方では、

たこを突くのか、時々針程の竿が空を突いてひらめく。其のこちらには、長い竿でさよりを釣つてゐる船が見える。それ竿を上げた。さよりがきらりと光つて船にをどり込む。何時何處から湧いて來たのか、笹の一葉に黒蟻二つ載せたやうなものが見える。船だ。黒蟻と見たのは二人の男で、せつせと漕いでゐるのだ。其の黒い姿が、櫓を押す拍子に、一つになつたり、二つになつたりしながら、次第に大きくなつて來る。

秋だ、秋だ、實に秋だ。つい後の逗子の山々も、氣のせゐか少し鳶色になつたやうだ。不動様のあたりに頻にもずの鳴くのが聞える。葉山から逗子のステーションに通ふ

がた馬車のラツパの音が聞える。

獵銃が無いと見くびつたものか、四五間先へ鷗いぶらが一羽下りて、時々水にくっつては魚をくはへて出て、人間は不器用なものだ。」と、さもあざけり顔に、こちらを向いて、胸を突出して、ゆらく波に浮いてゐる。

さりする中に、笹の一葉と見えた船は次第に近く漕いで来て、我々の船から三四十間離れた處に碇いかりを下して釣始めた。さよりを釣つてゐた船も一艘、其の側に寄つて來た。我々も碇を上げて、船を其の方に移した。

「どうだね、ぢいさん、鰻は……。」

「さうさね、やつと二つ三つ釣りましたよ。」

さあ氣をつけると、我々は争うて絲を下し、今や手答があるかと待つてゐると、二十間ばかり向ふの波の上を、だしぬけにびんくくととんで行くものがある。

「かますかね。」

と一しよに來た甲君が尋ねると、

「なあに、車鰻くるまうなぎですよ。鱸すげに追はれたんだね。」

と答ふる言葉の下から、一艘の船は手早く碇をぬいて、手早く櫓を押して、手早く竿を取出して、頻に鱸を釣らうとしたが、思はしくないと見えて、また漕戻して鰻釣にかゝつた。

つるべ落しといふ秋の日は、箱根の山に落ちかゝつて、

富士の頭ははや紫に染まつて來た。風はすつかりないで、落日の影がゆらくと水の上に金を流してゐる。もずも鳴き止んで、陸の方に鳥の聲が聞え始めた。實に靜かな秋の夕だ。空高く海廣くして、風なく波なく、夕日の光獨り此の間に満ちてゐる。

忽ちからんと、甲君の鈴が一つ鳴つた。と思ふと、からんからんりんくと、二つ三つ四つつゞけざまに鳴つた。來たなと思つて見てゐると、繰上げる絲の末には、果して鶯茶うぐいすの背に、銀色の腹をした、目の大きな、口の透通つた、五寸ぐらゐの鰻が、をどりながら上つて來た。と見る中に、自分の指先に懸けて置いた絲がびくりしめた。絲

を手繰ると、重い。大きいぞ。それ上つた。まる鰻だ。一尺はたつぷりあらう。

さあ釣れ出した。三艘の船が三の字に並んで、餌えをつける。はふり込む。手繰る。はや薄暗くなつた水の上へのびかゝつて、繰下し、引上げる。隣の船でどぶんとおもりをはふり込む音。こちらの船で手繰る絲の舷なべにきしる音。釣上げられた魚の、ばたく船板の上にはねては生簀いぢの水にはね込む音。

「いや、こいつは大きい。ちよ、ちよつと、其のたもを。」と甲君があわたしく叫んだ。すくひ上げたのを見ると、何だ、めばるの大きいやつだ。

「とう／＼かゝつたな。」

と乙君が胴の間で獨言するのを見ると、黒鯛くろだいを釣上げてゐる。さつきまでは餌を廻つてなかく食はなかつたが、遂に夕陰になつて眼がくらんだと見える。

三人は再び沈黙にかへつて、また暫く釣つてゐると、大方葉山の寺でつき出したのであらう、暮の鐘が一つぼりんと海面に響いて來た。

「どうです。もうしまひませうかね。」

と甲君は空を仰いだ。

「さうですな。」

とあき足らぬため息一つ。目を上げると、何時の間にか

日は入つて、富士から豆相の連山は、入日の後の卵色の空に藍色の波をうねらして、まだはつきりと輪郭りんかくを見せてゐるが、つい其處の葉山、逗子の山々には、既に夕もやがかゝつた。大島はもう見えない。鰹船の歸るのであらう、船は見えぬが、えつしよ／＼と櫓拍子が遙かに聞える。

他の二艘も碇をあげて歸りかけた。我々も道具を收めて、富士に見送られながら、紫流す水を緩やかに分けて行く。もう暮れた。海の上はまだ明るいが、行く方は、濱も松林も人家も夕食ゆふけの煙も山もぼりつとした一色にとけ合つて、唯ぼんやりとしてゐる。櫓聲の絶間を、三聲四

聲雁こがねが高く鳴いて通つた。(徳富健次郎「自然と人生」ニ據ル)

第十課 保險

人は何時どんな災難にかゝるかわからない。多額の費用を投じて新築した家が、火災のために時の間の煙と化することもあれば、壯健な人が一夜の中に不歸の客となつて、妻子が路頭に迷ふやうなこともある。其の外、船の難破によつて破産した船主の話や、運送の途中貨物を失つて大損害を被つた商人の話など、災害に關する幾多の悲惨な話が傳へられてゐる。

斯う考へてみると、我々の生活は誠に危険の多い不安なものと言はなければならぬ。そこで災害から起る損害に備へる方途を講じ、それによつて此の不安を除かうとするものが保險である。即ち一人にとつては致命的な大損害でも、若し之を多人數で分擔すれば、一人の負擔は極めて輕微で、殆ど意とするに足らないものとなる。故に多數の人が、同じ目的の下に集つて一つの團體を作り、其の中の人が損害を受けた場合には、協力して之を救済しようといふのが保險の趣旨で、他をも救ひ、他からも救はれようといふ、相互扶助の精神に根ざしてゐるのである。

保險事業は、之を經營する者即ち保險者と、保險を附せんとする者即ち保險契約者とが豫め契約をしておい

て、保險者は保險契約者から保險料として一定の掛金を受取り、契約中に保險事故が起つた場合には、約束の金額を被保險者又は保險金受取人に支拂ふ仕組になつてゐる。

今日我が國に行はれる保險にはいろくあるが、主なものは火災保險、運送保險、海上保險、生命保險等である。火災保險は、家屋や物品等が火災のために焼けた場合に、其の損害を填補するための保險である。

運送保險は、陸上及び湖川、港灣等に於ける貨物運送に關する保險であつて、運送中の貨物が火災、水難、盜難等にかつた場合に、其の損害を償ふものである。海上保

險は、特に海上に於ける事故に限るものであつて、船舶及び其の積荷に對する損害を填補するものである。

生命保險には、終身保險、生存保險、養老保險の三種がある。被保險者が死亡した場合に保險金を支拂ふのが終身保險、被保險者が一定の年齢に達した場合に保險金を支拂ふのが生存保險である。學資保險、結婚資金保險、徴兵保險などは後者に屬する。養老保險は終身保險と生存保險とを兼ねたもので、被保險者が一定の年齢に達した場合にも、又それまでに死亡した場合にも、保險金を支拂ふのである。

是等の保險事業は、一般に保險會社に於て取扱つてゐる。

るが、又政府でも簡易生命保險及び健康保險を經營してゐる。

簡易生命保險は、小口のみ契約に限られるもので、全國の郵便局で取扱ひ、手續が總べて手輕である。

健康保險は、工場や鑛山に働く人々に對する特別の保險であつて、其の人々の疾病、負傷、分娩、死亡等の場合に、醫療を施すとか、手當金を與へるとかするものである。保險によつて損害が填補されることは、獨り自分が安心を得るばかりでなく、やがて他に對して取引上の信用を増すことになる。それで諸般の取引が保險を利用することにより、大いに便益を受けてゐる。

第十一課 人を紹介する手紙

拜啓寒氣漸く相加り候處、愈御清福賀し奉り候。さて御存じの田代喜作氏の息喜太郎君並に小生隣家の畑謹一君、今回當村青年團より選拔せられ、近縣農家副業の實況見學の爲御地に參る事に相成候。兩君とも御地は始めてにて全く不案内の上、見學につきての便宜も少き由に候へば、何分宜しく御願ひ申上候。尙兩君には來る十五日早朝當地出發、途中大野驛にて下車、其の附近一見の上午後同地出發の由に候へば、御地着は多分同日夕刻と存候。

到着の上は早速御宅へ伺ふはずに候間夜分
にて恐縮の至に候へども何卒御引見なし下
されたく候先づは御紹介かたぐ御願ひま
で敬具

年 月 日

豊田耕一郎

瀬川清之助様

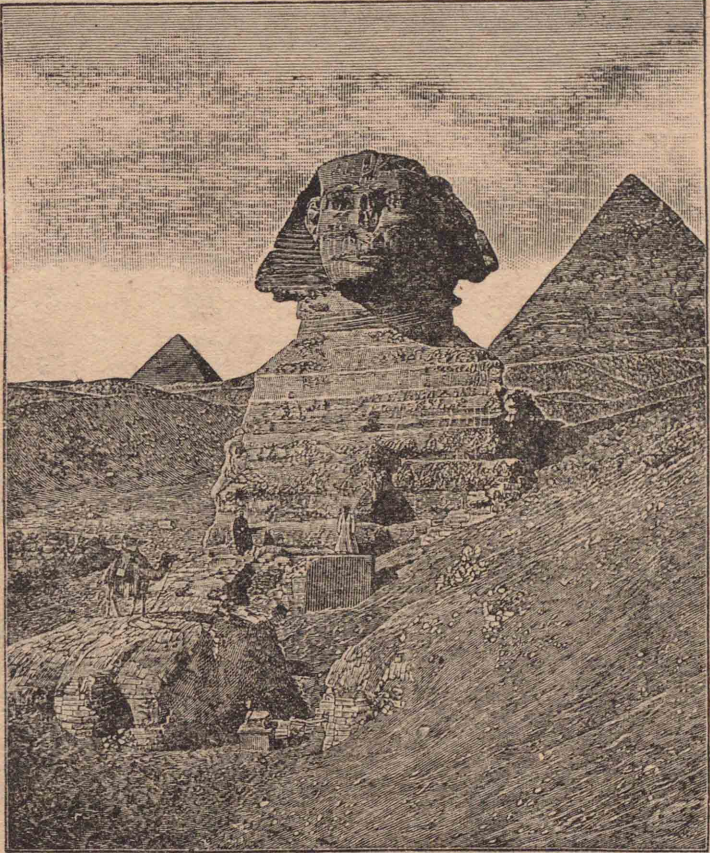
座右

第十二課 エジプトの遺蹟

エジプトは五千年の昔に於て、つとに文化の發達著し
く、國勢頗る盛なりしが、其の後しばく外國の侵略を
かうむりて、興亡幾變遷、當時の都市は悉く荒廢に歸し

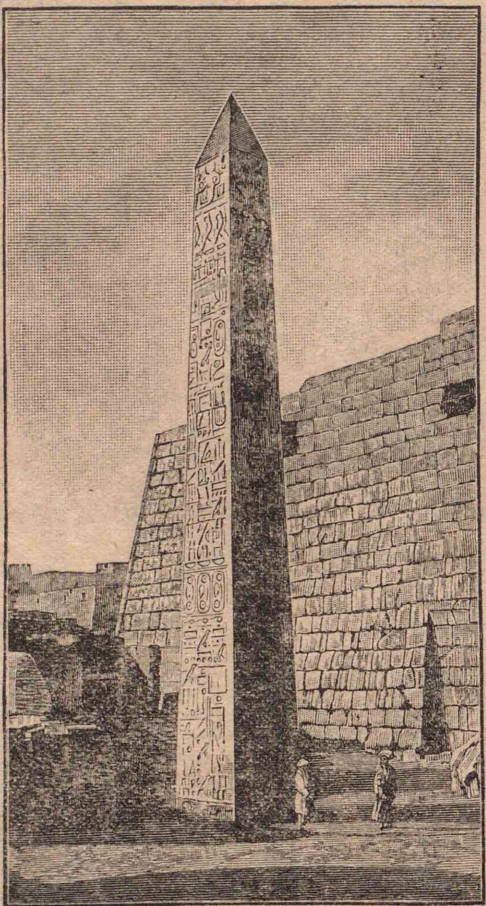
たり。然れども今尙沙漠の間に存する遺蹟を見れば、其
の規模の大なる實に人目を驚かしむるに足るものあ
り。今其の最も著名なるものの二三を記さん。

エジプト國現時の首府カイロ市の附近に至れば、處々
に雲をしのぎてそびゆる三角塔を見るべし。これ即ち
有名なるピラミッドなり。何れも巨石を積重ねて造りた
るものにして、如何にして之を積上げたるかは、今日尙
建築學者の疑問とする所なり。其の最も壯大なるもの
は、高さ約百四十七メートル、底面の一邊長さ各約二百
三十メートル、底面積約五萬三千平方メートルの廣き
に達せり。或史家の説によれば、此の巨大なる塔を建つ



るには、毎年洪水の季節三箇月間十萬人の人夫を使役して、二十年餘の長年月を要したるなりといふ。ピラミッドは國王及び王族の墳墓にして、内部に室房あり、壯大なる石棺を安置せり。此の石棺中には、數千年の星霜を経て尙朽ちざるミイラあり。

オベリスクは宮殿・寺院等の門前に建てたる石碑なり。細長き四角の柱にして、其の上部は尖端に終り、高きものは三十メートルを超ゆ。皆一本の石にして、多くは花崗岩を用ひ、鏡の如く磨きたる四面には、エジプト特有の文字を彫刻せり。總べて國家の大事、英雄の偉績等を傳ふるために建設せるものなるを以て、エジプト太古の歴史を研究するに最も必要



なるものなり。

エジプト文字の研究は早くより試みられたれども、十分に讀解くこと能はざりしが、西曆一千七百九十九年、三様の文字にて彫刻せる石を發見せしに、其の一はギリシヤ文字なりしを以て、之と對照して始めて讀得るに至れり。

體と四肢とは獅子をかたどり、頭部は人の形を具へたる異様なる大石像あり。之をスフィンクスと稱す。其の大なるものは、頭部のみにても十メートルに及べり。一對づつ相向ひて列



をなすを常とす。けだし宮殿寺院墳墓等の裝飾物なるべし。大ピラミッドの近傍にあるもの殊に雄大なり。是等のスフィンクス中には、吹寄せられたる砂中に埋没して、今は唯頭部のみ現れたるものあり。

第十三課 マルコ、ポーロ

コロンブスのアメリカ發見は、世界の歴史上に一時代を劃したる大事業なり。彼が此の大事業を成就するに至れるは、實にマルコ、ポーロの東方見聞記を讀みて、富源を東洋に開くの志を起したるによる。東方見聞記は、諸國の語に翻譯せられて今も世に傳はり、歴史家の尊重する史料たり。いざやこゝに、マルコ、ポーロの事蹟の

大要を語りて、其の貴重なる旅行記の由來を述べん。
 第十三世紀の中頃、イタリヤのベニスベニスの寶石商ニコロ、
 ポーロ・マフエオ、ポーロの兄弟は、行商の旅先より遠く支
 那に入りて、元の世祖忽必烈クビライに謁見し、語るにヨーロッパ
 文明の大概を以てせり。忽必烈之を聞き、キリスト教の
 力によりて自國を開發せんと欲し、故國に歸りて宣教
 師を伴なひ來らんことを兩人に委囑せり。こゝに於て
 兄弟は國に歸り、二人の宣教師と、ニコロの子にして當
 時十八歳の青年なりしマルコ、ポーロとを伴なひて、支
 那に向つて出發せしが、宣教師は間もなく前途の危難
 多きを恐れて、二人ながら途中より引返せり。これより



兄弟父子三人、遙々とペルシヤ
 を横ぎり、中央アジヤを過ぎて
 支那に入り、ベニス出發以來四
 年の歳月を旅路に送りて、漸く
 元主に謁することを得たり。其
 の間、山に臥し沙漠に寝ね、或は重き風土病にをかさる
 るなど、辛苦つぶさに言ふべからず。
 さてありし次第を物語りければ、忽必烈其の勞をねぎ
 らひて、厚く之を待遇せり。三人の中マルコ殊に才幹あ
 り、諸國の語に通じたりしかば、或は外國に使し、或は國
 務に參與して、頗る重用せられしが、支那に留ること十

七年にして、三人共にベニスに歸りぬ。

故郷を出でて二十餘年、一度の音信もせず、今歸り來りても容貌態度總べて變りはてたることなれば、死したるものとのみ思ひゐたりし親族朋友は、其のポーロ父子兄弟たることを信ぜず。よりて三人は一策を案じ、盛大なる宴會を開きて人々を招待せり。さて其の席上にて、旅中の服を人々の目前に持出して縫目を解き、中より數多の寶石を取出して卓上に並ぶるに、ルビー・サファイヤ・エメラルド・ダイヤモンドなど、燦然として目もくらまんばかりなり。これ皆忽必烈恩賜の品々にして、途中の危険を慮りて、斯くは衣服の中に縫込めたりしな

り。三人は、人々の大いに驚くを見て、事の次第をくはしく語り聞かせければ、人々漸く其の言を信じ、遂に争つて其の談を聞くに至れりといふ。

マルコ等歸郷の後、ベニスは商業上の競争よりゼノアと戦端を開きしかば、マルコは艦長として出征せしが、戦敗れて捕虜となり、ゼノアの獄中に囚れたり。然るに大旅行家マルコの名は既に遠近に高かりしかば、其の談を聞かんとするもの續々として來訪せり。さればマルコは其の煩に堪へず、こゝに旅行記編述の事を思ひ立ち、たましく、同囚の中にありし一文學者に、昔の記憶を物語りて之を筆にせしめ、遂に一部の書を成すに至

れり。これ實に有名なる東方見聞記なり。マルコ後ゆるされて故郷に歸り、天壽を全うして終れり。

東方見聞記には、當時全く東洋の事情に通ぜざりしヨーロッパ人を驚かしたる珍談奇説甚だ多し。又我が日本が、チパンの名を以て、此の書により始めて西洋に紹介せられしは、吾人にとりて最も興味多き事なりとす。マルコは日本を寶の國として記して曰く、

チパンは東海の一大島にして、大陸の海岸を去る一千五百マイルの處にあり。國民は色白く賢くして情深し。無限に黄金を産出すれども、國王は一切輸出を許さず。大なる王宮は全部黄金にてふかれ、床には總

べて指二本程の厚さなる金の延板を敷きつめたり。極めて美しきばら色の眞珠、其の他種々の寶石も無量にして、此の國の富の無盡藏なること、全く吾人の意想外なり。

第十四課 植物と氣象

春は霞がたなびいて、薄曇の日が多い。此の空合に雲かとまがふ櫻の花の咲亂れてゐるのは、よく調和の美を現してゐる。若しも此の花が澄渡つた秋の空に開いたとすれば、優美艷麗な櫻の特性は十が一も現れまいと思ふ。又かげろふの立つ春の野に、れんげさうたんぼ、

などが一面に咲亂れて、蝶・蜂などの舞遊ぶのは、如何にものどかな景色をつくる。

盛夏の候となれば、快晴の日でも、空氣は水分を含んで、何となく夕立の雲でも起りさうに思はれるが、其の青空に綠滴る木々の枝をさし交してゐるのは、また配合の妙を極めてゐる。やがて秋になれば、空氣が清らかになつて、空があくまで澄んだ中にかへでのみぢしたのや、いてふの黄ばんだ葉が照らし出されるのは、實に言ひ難い趣がある。冬の寒空に、梅臘梅などが春に先だつて咲いたのもまた似つかはしい。

雨のおもしろいのは、かきつばたはなしやうぶあやめ

などの咲亂れる五月雨の頃である。降るかと思へば晴れ、晴れるかと思へば降出して、其の度毎に花の美しさを増す。殊に是等の植物の花弁と葉とは、自ら雨を防ぐやうに出來てゐて、雨水が小さい玉となつて其の上に留つてゐる美しさは、形容する詞もない。

雨の多い處に生育する植物、又はさういふ地方から移し植ゑられた植物には、自ら雷雨などはげしい雨にふさはしいものが多い。彼の青桐は其の一例である。直立して膚の青い幹が、雨に洗はれて一入鮮緑の色を増し、きれ込んだ廣い葉が、はらくと音を立てて、葉末から餘滴を垂らすなど、如何にもよく其の趣を現してゐ

る。又はすの葉や芋の葉も、雨の中の風情がおもしろい。葉がぬれないばかりでなく、其の上にたまつた水は玉となつて、一種銀色の美しい光を放つ。

秋雨について聯想される植物も少くないが、先づ人の心を引くのは芭蕉であらう。秋も末になつて、其の葉が破れ、すぢのあらはれたのは、見るからはかなげに思はれるが、其の上に雨のしとく、とうち注ぐのは、取りわけて物さびしい。

樅杉松などの緑色の葉が眞白に積つた雪の中から現れ出たのや、南天の赤い實が雪の中に際立つて見えるなどは、色彩の配合上、見捨て難い美觀である。節くれ立

つた松、しなやかな竹が積雪の重みに堪へてゐるのは、

一は剛健、一は清楚の趣を現してゐる。(三好學「植物生態美觀」

ニ據ル)

第十五課 俳句

元朝の見るものにせん富士の山

宗鑑

梅散るや螺鈿こぼるゝ卓の上

蕪村

富士ひとつりづみ残して若葉かな

蕪村

島々に灯をともしけり春の海

子規

五月雨をあつめて早し最上川

芭蕉

やれ打つな蠅が手をする足をする

一茶

夕立や家を廻りてあひる鳴く

其角

静かそや岩にしみ入る蟬の聲

芭蕉

赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり

子規

白露をこぼさぬ萩のうねりかな

芭蕉

黄菊白菊其の外の名は無くもかな

嵐雪

雁の腹見送る空や舟の上

其角

雉子たつて人驚かす枯野かな

一茶

皿をふむ鼠の音の寒さかな

蕪村

水かれて橋行く人の寒さかな

子規

第十六課 年頭の十日

元日 火曜日 日本晴。五時半に起きて、いさんと

若水を汲む。後の岡に登つて初日の出を見る。雑煮を祝

つて学校の式に出た。学校の門には大きな門松の上
新しい國旗を立ててあるので、何となく気が改るやう
な心持がした。式が終つて、日野君と一しよに歸りなが
ら、明後日遊びに行く約束をした。

二日 水曜日 晴。午後から風が出た。おとうさんに
いひつけられて、町へ年賀状を出しに行く。僕も金澤の
ねえさんへ出した。角の酒屋の前で、大勢ではねをつい
てゐた。午後弟と書初をした。鑑の字がなか／＼むづか
しかつたが、それでもよく出来たとはいさんにほめら
れた。

三日 木曜日 晴。夕方から曇。弟に凧の糸目をつけ

てやつて、二人で家の前で揚げてゐたら、石井さんが年始に來られた。おかあさんの御用で買物に行つた後に、日野君が迎へに來たといふから、弟と遊びに行く。かるとをしておもしろかつた。餅を御馳走になつた。

四日 金曜日 曇。寒い。今日は朝から凧のうなりが聞える。おとりさんの手紙を持つて役場のわきの太田さんへ使に行つたら、お年玉に雑記帳を二冊下さつた。一冊弟にやる。夕方金澤のねえさんから小包が届いた。其の中に僕と弟へのお年玉の雑誌ざしもはいつてゐた。夜こたつにはいつてゐながら、お祖母さんに今日來た雑誌の話を読んであげた。

五日 土曜日 朝曇、雨、後雪となる。午前日野君が遊びに來た。弟と三人で雑誌の附録のすごろくをして遊んだ。ひる過から風が出て、門松に添へた竹の葉がかさかさと思つてゐたら、雨が降出した。それが何時か雪まじりになつて、非常に寒くなつた。夕方加藤の伯母さんが年始かたぐゝ來られたが、寒いので泊られた。』

六日 日曜日 雪。朝起きてみると、ほんたりの雪になつてゐた。風はもう止んだが、ずるぶん寒い。障子をあけて見ると、縁先の南天が雪でたわんで、赤い實が殊ことに美しい。午後讀方の復習をする。加藤の伯母さんは、今日もとりくお歸りになれなかつた。夕方までに雪が八

寸ばかり積つた。

七日 月曜日 晴。今朝は雪もからりとはれて、よい天気になつた。にいさんと雪かきをしてゐたら、弟も出て来たから、二人で雪達磨を作つた。十時頃から、伯母さんを送つて行つた。雪が足駄の齒にたまるので、二度もころんだ。泊つて行けといはれたけれども、明日から學校が始るから、夕方歸つて来た。いろくゝの物を御馳走になつた。

八日 火曜日 晴。風。今日は始業式だ。式が終つて、教場へ歸ると、鈴木先生から新學期の事についていろいろのお話があつた。歸り路、萬歳が金田君のところまで歌

つてゐた。今日も道が悪い。今朝日向に出して置いた鉢ハチの福壽草フクジュソウのつぼみが、一つ開いた。かはゆらしい花だ。

九日 水曜日 曇。朝の時間に書初と宿題の綴方を出した。次の十分の休にみんなて書初を教場にはつてゐたら、校長先生が見に来られた。去年轉校して行つた木村君から、組あての年賀狀が來てゐたから、ひる休に僕が總代になつて年賀狀を書いた。

十日 木曜日 午前曇、午後から晴。學校から歸ると、おかあさんが水餅をつくるかめを出してくれといはれた。早速物置の奥へはいつて持出すと、鼠が一匹はいつてゐた。つかまへようとする中に、びよんととんで縁

の下に逃げて行つた。僕がくやしがつたら、お祖母さんが、お正月だから逃した方がよいよ。とおつしやつた。

第十七課 都會と田舎

都會と田舎と何れかよき。此の間に對しての答は、恐らく人によりて異なるべし。田舎の人たまく、大都會に出づる時は、其の繁華と便利とに驚きて、或は何時までも此處に住みたしと思ふべく、これに反して、都會の人田舎に到れば、其の風光及び人情の美を羨むべし。

げにや都會は繁華なり。街路は四通八達し、大家・高屋軒を連ね、電燈の光は晝をあざむき、車馬の往來絶ゆる時なし。又都會は便利なり。電信・電話あり、電車・自動車あり。

通信・交通の便備らざるなし。官廳あり、會社あり、銀行あり、學校あり、病院あり、劇場あり、公園あり、百般の商店あり。實用に娛樂に、望んで得られざるもの一もあるなし。都會の生活を人の羨むも理なきにあらず。されど又長く住めば、都會の生活には苦勞多く、不愉快多し。物價高ければ費え多く、交際繁ければ煩ひ多し。世間は常に忙しく、騒がしく、人家密なれば空氣も自ら不潔なり。まして火災の憂も少からざるをや。

田舎には都會の如き繁華もなく、便利もなし。されど其の山水の美しきこと、空氣のさわやかなること、人情の厚きこと、生活に不安少きこと、是等の事は到底都會に

は求め難き所なり。傳染病・火災等の危険少きのみにて
も、田舎の生活は人の心をしてのどかならしむ。

斯く技能の如く、都會と田舎とはそれ〴〵得失あり、必ずしも何れが勝り何れが劣るといふべからず。知見を廣め、技能を修め、新に事業を起さんとする者などの、都會に出でんとするは、もとよりやむを得ざる所なるべし。然れども地方の開発に當り、堅實なる國家の基礎を作らんとするものは、宜しく田舎にありて、父祖傳來の遺業を守り、確實に生産を營み、進みては周圍の改善に力め、以て國家に盡くすべきなり。世には往々確なる目的なきに徒に都會にあくがれ出て、遂に其の惡風に染まりて、身を亡し、家を亡し、父母の名を汚す者あり。戒むべき事にあらずや。

第十八課 上毛の三山

赤城・榛名・妙義の三山は、余が生まれた高崎あたりから見ると、名工のゑがける風景畫の如く、東北・西北・西の三方に展開してゐて、其の背景には、北に子持・小野子、西に淺間を始め信越の諸山が遠望せられ、西南に秩父の連山が遠く起伏してゐる。片岡の清水山の如き小高い處から眺めると、赤城の背後に日光の山脈があり、ずつと東南の端には、筑波の峯が夢の如く淡く大空に浮いて見える。又碓氷の中腹から眺め下すと、關八州の平野は

赤城山



上毛の三山からさか落しに
東南に開けてゐて、眼界の果
を筑波が守つてゐる。其の平
野の間を、銀の帯の如く蜿蜒
としてうねつて行くのが利
根川である。

赤城の山容は榛名とは似て
ゐない。妙義とも全く違つて
ゐる。妙義山は大昔はもつと
優しい形をしてゐたのであ
らうが、雨風にさらされ、土や

砂が悉く洗ひ去られたため
に、だんく山骨があらはに
なつて、遂に天にかみつさ
うな峻しい姿になつたので
あらうと思はれる。あの不思
議な形は、人間にたとへたら、
先づ畸人といふ格であらう。
榛名は群山の堵列であつて、
どの山が特に高いといふ程
のことはない。各の山が仲よ
く腕と腕とを組合はせてゐ

榛名山



妙義山



るやうに見える。之を人間界にたとへたら、郷黨相倚るの姿であらう。
三山にはそれぐの特徵はあるが、形がよく整つて美しく、如何にも氣品の高い點に於て、赤城山に勝るものはない。遠くから眺めて、幼少な我が深い印象を與へられたのも、亦赤城山であつた。此の山は姿の美しいばかりでな

く、其の色に於ても、他の二山の遠く及ばないところである。

妙義は近く碓氷の方から見れば、一日中何度も變色するが、高崎あたりから遠望すると、紫紺の色に見えることが多い。榛名は大てい青みがかつた鐵色になつてゐる。赤城は淡紅色、藤色、櫻色などと時によつて變るが、上品の中に何處となくはでなところがある。さうして何時も溫和に靜坐して、上毛の山野に君臨する趣がある。形に於て、色に於て、又其の高さに於て、赤城は日本の名山の一に數へることが出来る。(松本亦太郎「渡り鳥日記」ニ據ル)

第十九課 日光の杉並木

我が國には到る處に並木がある。或は街道に立連なるもの、或は社寺の參道に並ぶものなど、何れも捨難い趣がある。さうしてそれらの並木の中には、數百年も前から其の地に立つて、人の世の幾變遷を眺めて來たものもあらう。殊に日光街道の杉並木の如きは、其の樹齡に於ても、其の延長、里程に於ても、これに匹敵するものは世界中にも少いといはれてゐる。もつとも日光には古くから二荒神社があつて、東照宮の出來る以前、既に道筋に杉を植ゑたことがあるといふやうな話も残つてゐる。けれども今日汽車の窓から見るやうなあのりつぱな杉並木は、決して其の時からのものではない。



は松平正綱といつて、幼少の時から家康に仕へ、東照宮の造營にもたづさはつた人である。正綱は主君に受け

東照宮の出來た時、大名は皆争つて高價な燈籠などを獻じた。ところが其の中に、一人全然變つたものを献上した人がある。それ

た厚恩と、其の死後までかうして仕へるといふくしき
因縁とに感激したのか、永遠に意義あるものを献上し
たいと考へて、遂に杉並木を作ることにした。

出来上つた並木は、日光山内から始つて今市に到り、此
處から北・東・南の三方に分れ、總延長十餘里に及んだ。正
綱の建てた碑の文によると、此の並木を造るには、實に
前後二十餘年の歳月を費したといふことであるから、
其の苦心もなかく、一通りではなかつたであらう。
それから約三百年、其の間にはずるぶんひどい風雨に
も會つたであらうが、成長するに随つて隣りあふ木と
木は、二本、三本、多きは七本、互に根本が密着して一本の

姿となり、容易に倒れないやうになつた。此の天を摩す
るやうな大木が幾百本、幾千本と立續いてゐる様は、稀
に見る偉觀である。かくて日光杉並木の名は、華麗目も
まばゆき彼の殿堂と共に、今は世界の一名物として知
られてゐる。

第二十課 日光山

二荒の山もと

木深き處

大谷の奔流

岩打つほとり

金銀珠玉を

ちりばめなして

ひねもす見れども

あかざる宮居。

浮きぼり毛ぼりの

柱にけたに、

振るひしのみので

巧をきはめ、

丹青まばゆき

格天井がらてんじやうに、

心をこめたる

繪筆ぞにほふ。

美術の光の

かゞやく此の地、

山皆緑に

水また清く、

樂園日本の

たへなる花と、

とつ國人さへ

めづるもうべぞ。

第二十一課 一年の折々

「元日や晴れて雀の物語。老いたるも若きもうらゝかに
さし上る初日の出を仰ぎ見て、大御代の新年を喜び合
ふ。三日までは朝なく、雑煮餅を祝ふも、古きならはし
とてうれしく、松の内の七日もいつしか過ぎて、八日よ
りは學校も始る。此の頃は年の中の最も寒き時にて、六
七日の頃より二月三四日の頃までを寒といふ。寒明け
て立春となる。立春は東風氷を解く時なりといへど、東
北地方の餘寒の厳しさは寒の中にも劣らず。立春の前
夜は節分にて、家々に「福は内、鬼は外。」と、豆まきの聲の聞
ゆる處今もあるべし。十一日の紀元節も過ぎて梅の花

も咲初むれば、梅一輪々々ほどの暖さ。の時候となる。
雛祭は三月三日にする習にて、桃の咲く頃なれば桃の
節供ともいひしが、今の曆にては花のつぼみ尙堅し。三
月六日は皇后陛下の御誕生日にて、此の日を天長節に
對して地久節と申し奉るも、臣民の至情なるべし。三月
十日は陸軍記念日なり。明治三十七八年の戦役に、我が
軍が奉天を占領せし日に當る。彼岸の中日なる春季皇
靈祭も過ぐれば、早くも咲出づる彼岸櫻をさきがけに
て、四月三日の神武天皇祭の頃は、野も山も皆花の雲な
り。四月二十九日は天長節にて、大君の千代八千代をこ
とほぎ奉らぬ民草も無し。五月の二日又は三日を八十

八夜といふは、立春より數へて八十八日目に當ればな
り。苗代の苗やうやくのびて、青き疊を敷けるが如し。五
日は男の子の節供とて、鯉幟こいぼの空高くひるがへるも勇
ましく、二十七日は海軍記念日なり。

六月十一二日の頃より梅雨の節に入り、連日のうつた
うしさ堪難けれど、農家には大切なる雨なり。七月七日
の夕は星祭のさゝ竹にぎはしく、盆ぼんの精靈祭しょうりょうまつりには燈籠
の火影物あはれなり。

八月の八日の頃は、曆にては立秋の節に當れども、暑さ
なほ退かず。立春より數へて二百十日・二百二十日の頃
は暴風雨多ければ、農家は安き心なし。秋季皇靈祭の頃

となれば、空あくまですみて、夜は蟲の音繁く、さしのぼる月影殊に鮮かなり。かくていつしか新穀も實のり、十月十七日の神嘗祭は近づく。十一月三日は明治節なり。明治天皇の御遺徳を仰ぎ、明治の昭代をしのばぬ國民も無し。菊の咲きほこり、紅葉の色づくも此の頃なるべし。十一月二十三日の新嘗祭も過ぎて後は、霜置きあられたばしりて、日も次第に短し。十二月二十五日は大正天皇祭ぞかし。残る日數も數ふるばかりになれば、處々に年の市など立ちて、人々また新年を迎ふるに忙し。

第二十二課 かんにん

或人文盲なる者を意見して、世の交は他の事はいらす、

たゞ堪忍の二字をよく守るべし。と言へば、文盲の人は頭をかたむけ、かんにんとは四字にて侍らずや。と指もて數へ、御許には思し違へなるべし。かんにんと四字にて侍り。と言へば、意見せし人、愚なる人かな。堪忍とはたへしのぶとよみて二字なり。と言ふ。彼の人また頭をかたむけ、たへしのおならば、また一字ふえたり。五字となり侍るべし。何と仰ありとも、我等は四字と思ひ侍れば、四字にてかんにんは致し侍るなり。と言へるに、其の人また、汝が如き愚なる文盲は實に諭し難し。人に似て蟲同様なり。己がまゝにすべし。と大いに憤りければ、文盲の人笑ひて、何とも仰あるべし。我等はかんにんの四字

を知り侍れば、悪口せられても、少しも腹立ち侍らざる
なり。』とて笑ひゐたりとぞ。〔雲萍雜志ニ據ル〕

第二十三課 村上義光

命の綱と頼みたる

吉野の城も、今ははや

嵐の前の花なれや。

終に散るべきものならば、

いで潔く散らばやと、

宮は覺悟をきめ給ふ。

主従合はせて幾十騎、

雲霞の如き敵中へ

命を棄てて切入れば、

敵はこらへず追立てられ、

谷間々々へ逃下る、

風に木の葉の散る如く。

さもあれ敵には新手あり、

入代りまた寄せ來るを、

長く防がんすべもなし。

藏王堂の大庭に、

宮一同を集めさせ、

最後の酒宴を張らせらる。

斯かる折しもかけつくる

村上彦四郎義光

痛手そこばく負ひながら

宮の御前にひざまづき

「はや事急なり。恐れながら

御名を冒して我死なん。

かしこけれども、御鎧

御直垂も賜はらん。

早くくと勸むれど、

いかでさること。忠臣を

一人残して落ちんや」と、

聽入れ給ふけしきなし。

義光大きに氣をいらち、

「國の安危を一身に

擔ふ御身ぞむざくと

こゝにて御最期あるべしや。

疾く落ち給へ」といひつゝも、

御物の具のひもを解く。

宮げにもとや思しけん、
物の具手早く脱がせられ、
我若し生きて世に在らば、
汝が後を弔はん。
死なば後世にて會ふべし。」と、
涙ながらに落ち給ふ。
御影遠くなりし頃、
宮の召物身に着けて、
やぐらに現れ、大音聲、

「大塔の宮は我なるぞ。
最期の様を見置けや。」と、
腹かき切つてぞ失せにける。

「すはや、宮には御自害ぞ。
御しるし得ん。」と敵兵ばら、
圍亂して集ひ寄る
騒にまぎれつゝがなく、
宮は吉野の山越に、
天の川へぞ落ち給ふ。

(坪内雄藏ノ文ニ據ル)

第二十四課 海苔

一 海苔採

小春日和の暖い天氣が毎日續くと思つてゐる中に、濱の方から吹上げる風が一日々と肌にしむやうになる。今夜はいやに寒いぞと話し合つた翌朝は、屋根の上に眞白な霜が置いてゐる。背戸の引残しの菜に枯葉がさして、其の邊に遊んでゐる鷄も日向ばかり探して歩く。こんな頃になると、村は海苔採の支度で忙しくなる。舟から歸つて來る者は、

「今年はばかに海苔の附きがいゝぞ。」
「もう二寸ぐらゐのびた。」

などと、毎日其の消息を傳へる。

十二月も末近くなると、そろ／＼海苔採が始る。此の時分から二月半ばまではよい海苔がたくさん採れるが、まだ潮の引方が少いので、屈強な者が時刻を計つて小舟で出かけるに過ぎない。しかし二月半ば後になつて大潮も近くなると、村中女子供まで總出で賑やかに採りに行く。

此の頃、濱にはまだ寒い風がびゆう／＼吹いてゐる。身輕に出立つて、手拭をかぶり、襟巻をした一群が岸に立つ頃には、引潮の後の遠い干潟が八九町も續いて、其の先に目ざす筈が一團々と黒く見える。ざく／＼、ざく



ざく、荒い砂を踏む足音にまじつて、賑やかな話聲が風にも負けず沖へくと進む。次第に筵に近づいて、引残りの水の中を行く頃になると、先發した舟の人達の歌ふ歌が、手にとるやうに聞えて来る。

筵は一柵の長さが二十間から三十間もあつて、それが

幾柵も列をなして並んでゐる。人々は自分の家の目印や名札の附いてゐる持柵の處に別れて、浅い大ざるをこわきに、いよ／＼仕事にとりかかる。筵は小枝の先まで、べつとりと紫黒の色で覆はれてゐる。人々は右



手の指を器用に働かせて、のびのよい分だけを摘採つてはざるに入れる。黒い筵の間からは白い手拭の先がちらく／＼見えて、賑やかな話聲が聞え、美しい歌が其處此處に起る。寒い風が吹かうが、指先が凍えようが、人々は愉快に元氣よく仕事を續けて行く。

一場所の自分の家の持柵を採終ると、次の場所の持柵に移つて行く。ざるの中には海苔が次第に満ちて來

て、どつしりと腕にこたへる頃には、一度引いた潮がまたそろ／＼とさして来て、さゝ波が足をなぶり始める。人は採りためた海苔を、洗ひざるといふ深いざるに移し、水の深い處に行つて、棒や手でかき廻して洗ふ。ざるの中の紫黒の色は見る／＼美しくつやを増して、生海苔の香が高く鼻をうつ。

潮はますます／＼とさして来る。今まで砂の上に立つてゐた筈は、沖の方のから次々と水につかつて、見る／＼中にあたりが一面の水になつてしまふ。人々は道具を舟に託すと、身輕な足に水を分けて、三々五々岸に向つて急ぐ。岸の土手の上では、先に上つた人達が暖かさうにた

き火などをしながら、

「早くおいでよう。」

と手招してゐる。

潮はだん／＼岸に迫つて来る。其の静かな波に乗つて、後に残つた小舟も續々歸つて来る。筈はもう大部分水に沈んで、處々に頭だけが點々と黒く見える。

二 海苔すき

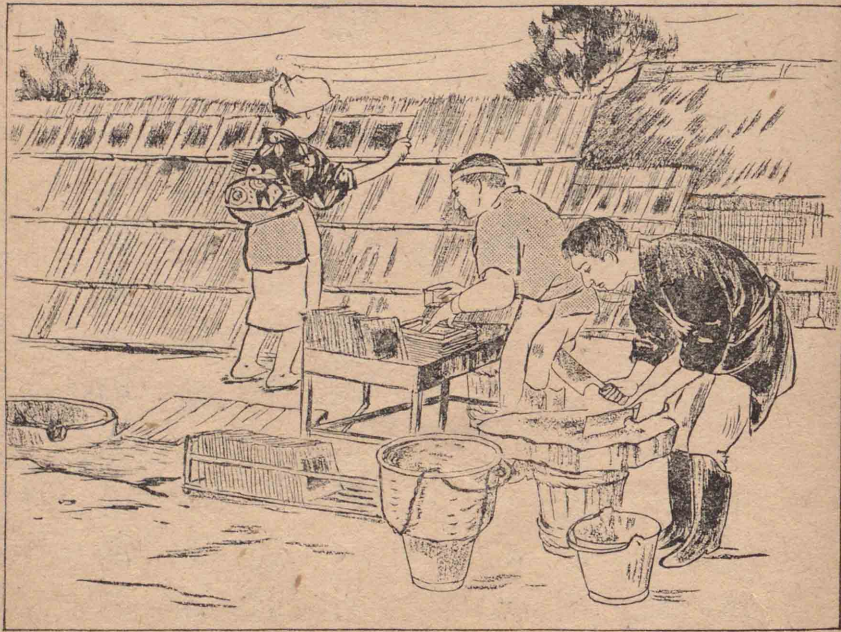
採つて來た海苔は、天氣さへよければ、其の日の中か翌朝までにはすいてしまふ。

先づざるの生海苔を二尺四方もある木の臺の上にあけて、まじつてゐるごみを拾ひ取る。それが濟むと、今度

は大きい庖丁はちりやうを両手に持つて、とんとんと拍子ひたひたおもしろく刻み始める。薄い刃が堅い臺に觸れる度に、紫黒色の海苔の山が次第に崩れて行く。やがてそれが十分細かになつた時、大きい桶かに移し入れ、海苔一升に三斗ぐらゐの水を入れて薄める。これで原料は全く出来上つたのである。

すく方法も至つて簡單である。四角な臺の上に、小さい葦簣よしすを二三十枚も重ね、更に海苔の大きさの框かを載せる。此の框の中に一枚分の海苔水を汲取つてあけると、水は簣を通して下に流れ、海苔だけが工合よく四角に広がる。それと同時に、右手で上の框をとり、左手で海苔

のすかれた簣を起す。框を放した右手は直に左手を助けて、簣は側にある臺の上に斜に立掛けられる。これだけの所作がすばやくしかも器用に繰返されて、重ねられた簣は見るく中に低くなつて行く。臺の上に立掛けられた簣は、やがて五十枚ぐらゐもたまると、別の臺に移され



海苔の拍子

て、乾場に運ばれる。

乾場には、傾斜をつけて立てた長い乾臺が幾つもある。運ばれた海苔の簀は、次々と此の臺の上に並べられる。日當りのよい廣場に並んでゐる乾臺が、次第々に薄黒い色に彩られて行くと、蒸發する淡い湯氣にまじつて、優しい海苔の香がそこらに満ちる。

弱い冬の日ざしても、大てい三四時間もかゝると、乾場一ばいの海苔は皆乾いてしまふ。すると人々は簀のままそれを家に運んで、一枚々々はがしとり、十枚づつ重ねては二つ折にし、箱か罐かんに收める。斯うして一日の勞苦は、直にりつばな食料品となるのである。

第二十五課 福澤諭吉

明治維新後の社會に大なる影響を與へたるものは、西洋思想の攝取なり。而して其の思想の紹介者として最も名あるは、福澤諭吉なり。

諭吉は豊前國中津なかつの藩士はんしにして、三歳の時父を失ひしかば、母の手一つに育てられぬ。十四五歳の頃より漢學を學び、二十一歳の時長崎に行きてオランダ語を修めしが、翌年長崎を去りて大阪に出で、緒方洪庵こうあんに就きて更に之を學べり。其の後安政五年、二十五歳、藩主の召により始めて江戸に出で、鐵砲洲の藩邸に塾を開きて、藩の子弟にオランダ語を教授せり。

發憤條約幕府
第二十五課 福澤諭吉
研究
百六
沒頭幕府

使節 購鐵砲 巡視 慶應

諭吉の江戸に出てたる年は、恰も幕府が諸外國と條約を結びたる時なりき。諭吉其の頃横濱に遊びて外人の店に到りしが、オランダ語にては全く用を辨ぜず、世界の言語中、イギリス語の最も廣く行はるゝことを聞きぬ。こゝに於て大いに發憤し、是より専らイギリス語の研究に没頭したり。是より先、幕府はオランダより一軍艦を購ひしが、萬延元年春、之をアメリカに遣はさんとす。諭吉一行中の某氏に請うて其の從者



となり、彼の地に渡りて、始めて文明國の實況を視察せり。歸國後、幕府の外國方に出仕し、翻譯の事を司りぬ。文久元年冬、幕府使節をヨーロッパに遣はすや、諭吉も命ぜられて行を共にし、フランス、イギリス、オランダ、ドイツ、ロシア、ポルトガル等の諸國を巡視せり。諭吉が後年著したる「西洋事情」といふ書は、此の巡視中に得たる知識によること多しといふ。其の後、慶應三年、幕府事ありて再び使節をアメリカに遣はしたりしが、諭吉またこれに同行したり。歸國後、鐵砲洲の塾を芝の新錢座に移し、年號に因みて始めて名を慶應義塾と命ぜり。斯くて熱心に教授に従事し、彼の

大民

第二十五課

福澤諭吉

規模

獨立自尊

百八

規模

戊辰はしんの役、江戸市中の混亂を極めたる時にても、授業平生に異なることなかりきとぞ。

規模文章功績

其の後明治四年、更に義塾を三田に移し、益規模を大にしたり。時に兵亂漸くをさまり、學に志す者争うて此處に來集せり。諭吉の之を教育するや、總べてイギリス語の書を用ひて、力めて日新の知識を與へ、獨立自尊を主義として、國家有用の材を養成せり。
諭吉は斯く塾生を養成せるのみならず、又大いに書を著して、或は西洋の事情を述べ、或は外國の地理を教へ、或は理科の知識を與へ、處世の道を説きなどして、普く國民を導きたり。而して其の文章はむづかしき漢語、古

功績了解

語を避けて、多く平易なる言語を使用し、力めて通俗を旨としたりければ、人よく之を了解することを得て、其の著書廣く行はれたり。
明治三十三年五月、天皇其の功績を賞して、特に金五萬圓を下し給へり。翌年二月、六十八歳にて逝けり。

第二十六課 人形を贈る

申譯

自然

御葉書拜見、毎度御返事が遅くなるとの事誠

差上

に以て申譯もこれなく自然優長なる京都風に染みたるものかと存候、明日石田君御出發の由に付同君に託し何か差上げんと存候ひしも思はしきものは一つもこれなく宇治人

奈良伏見

清水焼

差出 駕来 先程 停車

場

形奈良人形伏見人形清水焼人形各一個ほん
 の慰までに座右に呈し候奈良人形は餘り
 小さき品にてもう少し大きく上等なるもの
 ならばと存候へども致方なく候宇治人形は
 昨年十月十一日石田君等と宇治に至りし時
 求めしもの茶摘人形と張札したる店ありし
 故これおもしろしと思ひ店に入りて見しに
 存外やすからず少々閉口の色をあらはし候
 處先方の申候には宇治の人形は茶の木を以
 て製する故木堅くして奈良人形などよりは
 彫るにむづかしされば仕上りはきたなきが

伏見 清水焼 張札 閉口 閉口 停車 駕来 先程 停車場

如くなれども直は高きなりとそれでも餘り
 に高しまけよといふまからぬと答ふまから
 ぬこそ幸と逃出して停車場に至り汽車を待
 つ間何心なく其の邊を眺め居りしに年の頃
 十三四の美しき少女あり友達とむつまじく
 話し居りしがさていよく汽車に乗らんと
 する時彼の少女あわたくしく驅來りて先程
 の茶摘人形を差出しておまけ申しますといふ
 今更いらぬともいはれず持歸り候人にはお
 もしろくもなき事ながら我が身にはをかし
 からざるにあらざる時々取出してはほゝゑま

友達 差出 先程 駕来 停車場

摩 薩 行 死

れしものに候甚だつまらぬものばかりなほ
何か然るべき清水焼にてもと思へども明日
の間に合ひがたければ致方なし重ねての事
に致すべく候

本日は賀茂祭なれば母をつれて行列を見上
賀茂に参詣大徳寺に至りなほ金閣寺北野へ
も至らんとしたるに雨に降られてやむなく
大徳寺より立歸り候藤岡作太郎東圃遺稿ニ據ル

第二十七課 故郷の花

薩摩守忠度は、いづくよりか歸られたりけん侍五騎童
一人、我が身共に七騎取つて返し、五條なる三位俊成卿

侍 五騎 参 行列

の許におはして見給へば、
門戸を閉ぢて開かず。忠度
と名のり給へば、落人歸り
來れりとして、門内騒ぎ合へ
り。薩摩守急ぎ馬より飛ん
で下り、自ら高らかに
に申されけるは、三位
位殿に申すべき事
ありて、忠度が参り
て候ふ。たとへ門は
明けられずとも、此



故郷の花

の際まで立寄り給へ。申すべき事の候ふ。と申されたり
 ければ、俊成卿、其の人ならば苦しかるまじ、明けて入れ
 申せ。とて、門を明けて對面ありけり。事の體何となりも
 のあはれなり。
 薩摩守申されけるは、此の二三箇年は、京都の騷國々の
 亂出て來、君既に帝都を出てさせ給ひぬ。平家一門の運
 命今日はや盡果て候ふ。忠度かねて撰集の御沙汰ある
 べき由を承り、生涯の面目に、一首なりとも御えらびに
 入るを得ばと存じ居り候ひつるに、斯かる世の亂出て
 來て、其の沙汰も無く候ふは、こよなき歎に候ふ。此の後
 世靜まりて、撰集の御沙汰候はば、是なる卷物の中に然

盡果 盡

沙汰

疎略

疎略

るべき歌もあらば、一首なりとも御恩蒙りたく、まかり
 越して候ふ。とて、日頃よみ置かれたる歌どもの中に、秀
 歌とおぼしきを百餘首書集められたる卷物を、鎧の引
 合より取出でて、俊成卿に奉らる。
 俊成卿之を開いて見給ひて、斯かる忘れがたみを賜は
 り候ふ上は、ゆめく、疎略には存ずまじう候ふ。と宣へ
 ば、薩摩守、屍を山野にさらさばさらせ、今は浮世に思ひ
 おくことなし。さらば暇申して。とて、馬にうち乗り、かぶ
 との緒を締めて、西をさしてぞ歩ませ給ふ。俊成卿後を
 遙かに見送りて立たれたれば、忠度の聲とおぼしくて、
 「前途程遠し、思を雁山の夕の雲に馳す。」と、高らかに口ず

さみ給へば、俊成卿もいとあはれに覺えて、涙を押さへて入り給ひぬ。
 其の後世静まりて、千載集をえらばれけるに、忠度のありし有様、言置きし言の葉、今更思ひ出でてあはれなりけり。件の卷物の中に、然るべき歌いくらもありけれども、其の身勅勤の人なれば、名をばあらはされず、故郷の花といふ題にてよまれたりける歌一首ぞ、よみ人しらずとして入れられたる。
 さゝなみや志賀の都は荒れにしを
 志賀

第二十八課 鳥の翼と昆虫の翅

むかしながらの山ざくらかな(平家物語ニ據ル)

近頃は飛行機で空中を自由に飛廻ることが出来るやうになつたので、世間では、人間もいよく鳥の仲間入をしたと言つてゐるが、私は、鳥よりも寧ろ昆虫の仲間入をするやうになつたと言ひたい。

元來鳥の翼は、動物學上我々の腕に相當するものであつて、鳥はこれによつて空を飛ぶことが出来る代りに、我々の手や獸類の前肢のやうな作用をするものが缺けてゐることになる。よく子供の繪本などに、鳥や獸が人間と同じく着物を着て、學校に行つたり、家で遊んだりしてゐる繪がある。獸の方は前肢がすぐ手になつて、至極自然にいつてゐるが、鳥の手には畫家も困るとみ

えて、いろいろにこじつけてゐる。

昆虫は鳥と違つて、翅と肢が全く別になつてゐる。即ち手足に全然無關係な飛翔用の道具を持つてゐるといふわけで、此の方が鳥よりも寧ろ飛行機で飛ぶ人間に似てゐるのである。昆虫以外の動物で飛翔するものは、何れも鳥と同じく身體の何れかの部分の變化したものを用ひてゐる。例へば、蝙蝠の翼は指の間にまくを張つたものと考へてよく、飛魚はひれの延びたもので飛ぶのである。此の點からみると、天使や天狗の翼は、外形は鳥の翼に似てゐるが、全然手足から獨立してゐるから、實は昆虫の翅に相當してゐるのである。そこで若し

實際是等のものが存在してゐるとしたら、其の翼は動物學上の大問題となるに違ひない。

前に言つた通り、昆虫の翅は獨得のものであつて、初から翅として發達して來た由緒正しいものである。三代將軍家光は諸大名に向つて、我が父祖は元は諸君と同輩であつたが、自分は生まれながらにして將軍である。と言つたさうであるが、若し昆虫の翅に口があつたら、自分は生まれながらにして翅である。と言ふかも知れない。三宅恒方「天使の翅」ニ據ル

第二十九課 奉天附近の大會戰

露軍のクロパトキン大將は、此の一舉を以て日本軍を

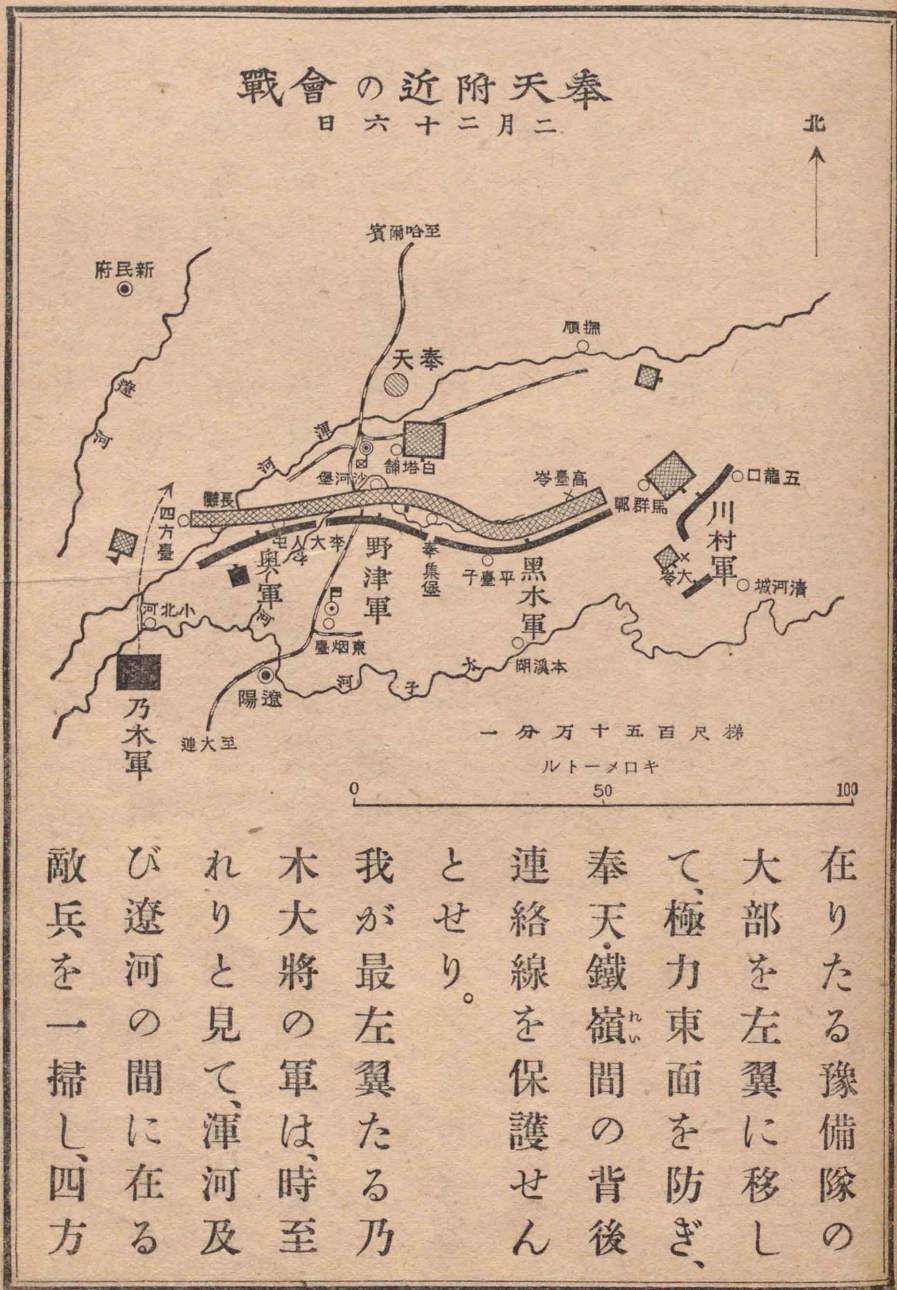
破り、遼陽・沙河敗戦の汚名を雪がんと欲し、奉天に根據を定め、戦鬪員約三十六萬七千二百人、大砲千二百十九門の大軍を擁し、其の後方に備へたる部隊を合すれば、總員五十萬、防備をさく、怠なく、援軍の到るを待ちて攻撃に移らんとす。我が軍の之に對する戦鬪員は約二十四萬九千八百人、大砲九百九十二門にして、其の兵力彼に及ばずといへども、今度の一戦には必ず敵をして再び起つこと能はざらしめんと、大膽にして周密なる方策を定め、非常の覺悟を以て戦機の熟するを待てり。敵味方共に此の大兵を擁して近く相對し、東は清河城附近より西は遼河に至るまで、山にわたり川を横ぎり、

戦線約百六十キロメートルに及べり。時は二月の末、方、堅氷河水を鎖し、寒風膚をつんざくといへども、勇氣勃勃たる我が軍の將校下士卒は、日夜敵壘に對して肉躍り血湧けり。

我が作戰計畫は、漸次に敵の兩翼に迫りて、其の退路を斷ち、以て之を全滅せんとするに在り。即ち黒木・野津・奥三大將の率ゐたる各軍は、正面より敵を攻撃し、乃木大將の率ゐたる軍は、渾河・遼河の中間地域より進みて敵の右翼を包圍し、又川村大將は我が最右翼軍を率ゐ、是等の諸軍に先立ち撫順に向ひて運動を起し、以て敵の左側を包圍し、且其の兵力を此の方面に牽制し、全軍相

依りて敵を奉天附近に壓せんとす。

戰機は愈熟せり。明治三十八年二月二十三日、我が最右翼なる川村軍先づ活動を開始して清河城を抜き、進んで馬群鄆に迫り、又中央の各軍は沙河の陣地に在りて、徐に左右兩翼に於ける戰局の發展を待つ。初めクロバトキン大將は我が主力の中央に在るを認め、彼亦大軍を集めて之に當らしめ、且奥軍の左翼を攻撃して、漸次中央に及さんとし、既に二月二十五日を期して發動せんと企畫せり。然るに我が右翼軍の活動頗る猛烈なるを見るや、先に旅順より北進せし乃木大將の精銳此の方面に向へりと信じ、急ぎ其の手裏及び西方右翼後に



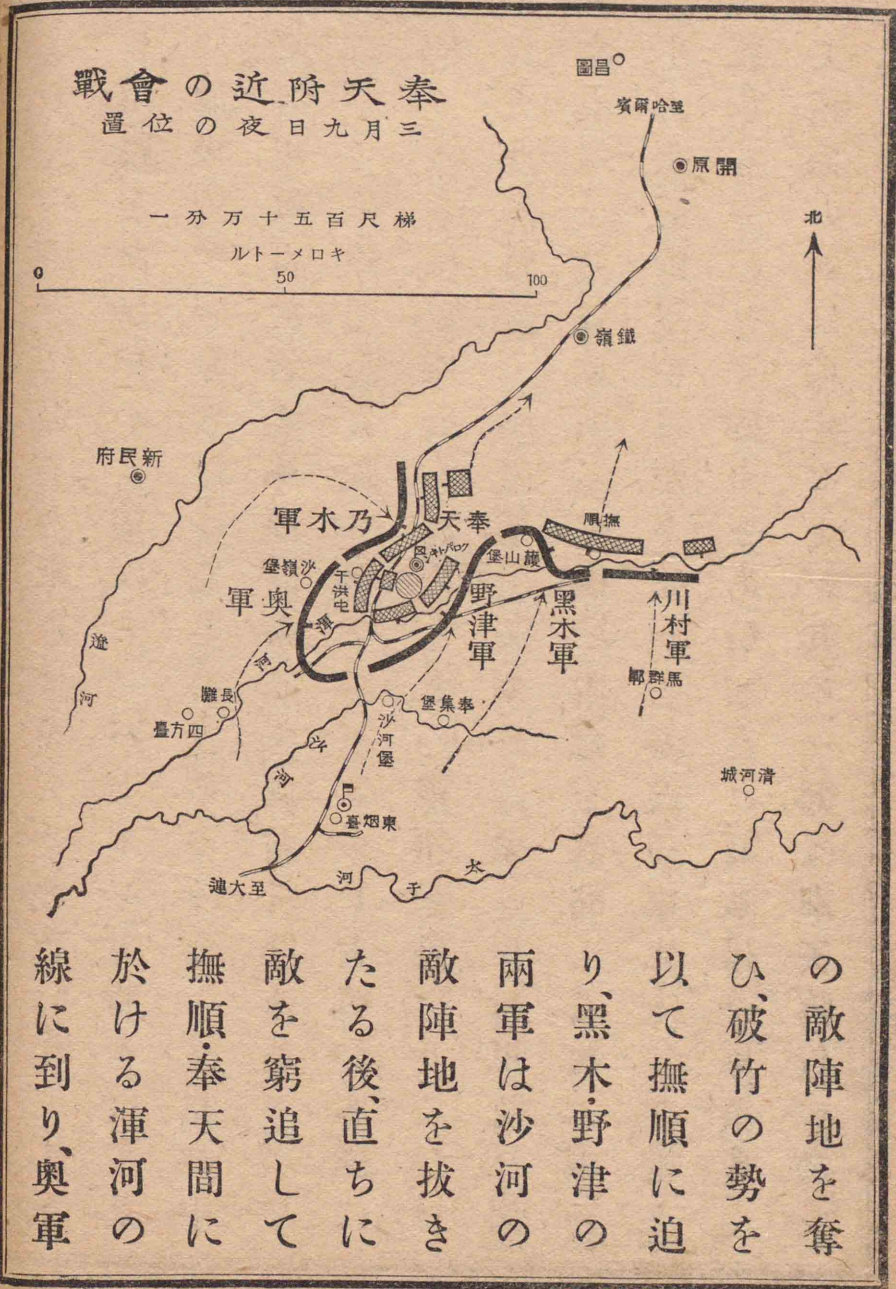
在りたる豫備隊の大部を左翼に移して、極力東面を防ぎ、奉天鐵嶺間の背後連絡線を保護せんとせり。我が最左翼たる乃木大將の軍は、時至れりと見て、渾河及び遼河の間に在る敵兵を一掃し、四方

臺附近の敵を撃破し、天馬空を行くの勢を以て北進し、三月二日、突如として奉天の西方二十キロメートルなる沙嶺堡附近に現れたり。クロパトキン大將の驚知るべきなり。即ち大將は、先づ其の手裏に残りし豫備隊を舉げて乃木軍に當らしめ、更に右翼及び中央軍より精兵をぬきて之に加へたるも、遂に其の効なく、乃木軍の撃破する所となれり。

此の間、我が中央の各軍は猛然起ちて攻撃を始めしが、敵壘堅うして、惡戦苦闘を重ぬること數日に及び、僅かに其の一部を奪取したるのみ。然れども此の攻撃は、川村軍の馬群鄆攻撃と相待ちて、敵の大部を此の方面に

牽制し、乃木軍の迂回運動を容易ならしめたり。

乃木軍が益、敵の右側背に迂回するや、奥軍は敵の右翼を撃破しつゝ、逐次渾河の右岸に移りて、之に連絡し、乃木軍は遂に奉天の西北方に出でて、將に敵の退路を斷たんとせり。こゝに於てクロパトキン大將は、乃木軍に向ひてしばし、大逆襲を試みたるも、悉く其の効なきがため、やむを得ず令を諸軍に傳へ、七日夜沙河の陣地を棄てて、渾河の豫定陣地に據らしめ、更に大兵を奉天の西北方に集めて、再び乃木軍を撃破せんと企てたり。之と同時に、我が滿洲軍總司令官大山元帥は總追撃の命令を發し、全軍一せいに猛進す。川村軍は馬群鄆附近



の敵陣地を奪ひ、破竹の勢を以て撫順に迫り、黒木、野津の兩軍は沙河の敵陣地を抜きたる後、直ちに敵を窮追して撫順、奉天間に於ける渾河の線に到り、奥軍

は奉天の西方に迫り、乃木軍は奉天の北方に出でて敵の退路をおびやかす、遂にクロバトキン大將をして其の最後の企圖をなげうたしめたるのみならず、我が中央の軍は晝尙暗き風塵に乗じて、九日渾河を渡り、其の右岸の敵陣地を分斷せり。クロバトキン大將が本國に向つて、余は包圍せられたり。との電報を發したるは、けだし此の時なるべし。斯くて十日に至り、川村軍及び黒木軍の一部は協力して撫順附近を攻略し、又黒木軍の主力及び野津軍は敵を追ひて奉天の東北方に突進し、息をもつがせず砲火をあびせれば、敵は全軍潰亂して鐵嶺方面に敗走せしが、其の一部は奉天附近に於て

我が軍のために全く包圍せられ、混戰翌十一日に及び、伏屍累々として山野に充滿し、途を失して捕虜となる者、力盡きて軍門に降る者、其の數を知らず。

敵はかねて鐵嶺附近に據り再抵抗を行ふ計畫にて、堅固なる防禦工事を施したりしが、我が軍の神速なる追撃の爲、據守する暇も無く、鐵嶺の東北約二百四十キロメートルなる公主嶺の邊に逃走せり。斯くて三月十六日を以て、黒木軍及び野津軍の一部は鐵嶺を占領し、川村軍は興京を陥れ、乃木軍の騎兵は更に開原、昌圖地方に進入したれば、南滿洲の山野また敵の隻影を留めず。奉天附近の大會戰こゝに全く終を告げぬ。

此の役や、戰鬪を繼續すること半月を超え、敵の失ふ所死傷約六萬百人、捕虜約二萬一千八百人、行方不明約七千五百人、大砲四十八門及び軍旗の外、小銃、彈藥、輜重車、輜等の遺棄枚擧に暇あらず。實に有史以來未曾有の大戦、長戦、激戦にして、日本海海戦と共に古來稀なる大勝なりき。

第三十課 學校園

梅は散りて鶯の聲も老いたり。春は漸くたけなはならんとす。

果樹園の桃のつぼみは赤くふくらみたれば、五六日を出でずしてほころび出づべく、梨、林檎の花もそれより

三四日とは後れざるべし。學年改りて、我等が二年に昇級する頃は、紅白美を競ふ好時節となるべし。あゝ、希望多き春よ。

菊の苗は既に四五寸に延びたり。根分せんも今暫しなり。今年は去年よりも見事なる花を咲かせたきものかな。コスモスの種も蒔終へたれば、花盛の美しさ思ひやらる。日を追うて成長する草木を見る嬉しさには、草取培ひの骨折も忘れぬべし。

鶏頭の種を蒔くに就けて想ひ出づるは、學友某君の事なり。去年の今頃は、共に鋤執りて苗床の手入などせしが、梅雨の頃より病にかゝり、九月の新學期、君が植ゑし

高讀二

草の花咲く頃となりても、君は出席せず、斯くて十月の半ば、葉末に結ぶ白露と共に消行きし悲しさ。其の葬式の日、同級生一同が我が校園の鶏頭を捧げて禮拜せし時、君の近親の人々の泣崩れし有様、今も尙目に残れり。今年はやめかゝる凶事の無かれかし。

今年始めて植ゑたる除蟲菊は、害蟲の驅除に必要なものみならず、蚤取粉として、蚊やりとして効用廣きものなれば、收穫多からば、學校園の収入も増加すべし。

蔬菜園の山東菜、白菜等は、去年も出來好かりしが、大根とかぶらとは甚だ出來なりき。地味の合はざるためか、又は耕種の方法の宜しからざりしたためか。二年生の

擔任せし區域は可なりの出来なりきといへば、今年は尙一層注意せん。

今年は正月以來度々の降雪あり、雨量も適度なりしが如し。去年の夏は長雨打續きて、すゝわかぼちや等は甚だ不出来なりしが、幸にして梨柿等は何れも上出来にて、秋季運動會の日には、來賓一同にも分ちし程なりき。今年は如何あるべき。

月日の過行くは梭の飛ぶよりも早しとか。昨日今日種を下し、苗を移しし花卉、野菜の花咲き實を結ぶも暫しの程ぞ。待たるゝものは秋の日にこそ。

第三十一課 世界の望

高讀上

世界の望は日本に繋がり、日本の望は日本の青年と處女とに繋がる。人類相食まんとする修羅の衢すまたをして、萬邦協和、四海同胞の黄金世界となすの責任は、一に我が青年と處女とに繋がる。然も青年と處女とをして、其の責任を果さしむる第一歩はたゞ我が皇道を世界に宣揚して、世界をして向ふ所を知らしむるに存する。しかして其の宣揚や、言論の上でなく、實行の上に存する。我等は決して現在の日本の状態に満足するものではない。しかも、ドイツ、イタリヤの如き、我が國民の皇室中心主義を目標とし、自發的に一致協戮きやくし、自發的に獻身奉公するを以て、一大模範となしつゝある。いやしくも

我が未來の日本を擔當する青年處女が此の目標に向つて、更に一步を轉じ、眞に日本精神の活ける權化となり、活ける標本となるを得ば、東亞と言はず、歐米と言はず、世界の人、皆風を望んで之に同化しよう。これは決して我等の空想ではない。我等の晝夢ではない。我等の雲中の樓閣ではない。現實の問題である。

しかも其の事たるや決して非常の難事ではない。たゞ各個人がめい／＼其の日常の業務を忠實に踐行すれば足りる。一人健全にして一家健全に、一家健全にして一町村健全に、一町村健全にして一府縣健全に、一府縣健全にして日本健全に、しかして健全なる日本がやが

て世界の指導者として我が皇道を世界化するに至る。其の順序は、此の如く天日を見るよりも明白である。希望は天上にあり、實行は脚下にある。萬里の行は一步より始る。決して其の高遠を高遠として回避すべきものではない。やがては、こゝに到達すべき日が到來する。萬一現代の青年處女が到達せざれば次代、然らざれば其の次代、綿々として絶えず、混々として續くは、我が日本歴史の本性である。且つ特性である。我等は我が青年と處女との訓練と教養とが日本的にならんことを主張する。彼等をして完美なる日本人たらしめんか、それがやがて模範的世界人たるべきは必

然のことである。しかしして日本的の訓練と教養とは、先づ日本人たるの自覺心を與へ、次に日本人たるの資格を與へることだ。日本人たるの自覺の基調は、天皇陛下の赤子であることの自認にある。日本人たる資格の基調は、君國奉仕の精神の存養にある。

しかしして、それよりして時代に相應する訓育と修養とが加味せらるべきは勿論のことだ。日本國民は身を以て君國に奉仕せんが爲に生活するものにして、生活せんが爲に君國をして我が身に奉仕せしむるものではない。此の一點に於て歐米功利主義の國民とは全く對蹠の位置に立つものたることを知るが、日本國民たる

第一の資格である。それを其の通りに實行するが第二の資格である。しかししてそれを實行すべく、最も近世的現代的の環境に順應して善處するの材器、能力を修得するが第三の資格である。

余はすでに老人である。如何に心は逸るも、時の力に抵抗することは不可能である。されば如何に長生を祈るも、とても我が日本の皇道世界化の日を見ることは出來まい。しかも其の日の來るべきを確信して敢へて之を次期の日本を擔當する我が青年處女に囑望する。希くは健全なる日本人たれ。質實なる日本人たれ。勇敢なる日本人たれ。光明開朗なる日本人たれ。堅忍不拔なる

日本人たれ。しかして如何なる場合たりとも君國の爲には欣然として一身を獻げる日本人たれ。果して此の如くんば、如何に日本の前途が多難であつても、如何に日本の周邊に荆棘けいげきが充滿しても、如何に世界の大勢が我に逆行して來ても、決して懸念するには及ばない。如何なる場合でも、眞の憂患は外より來らずして、内より生ずるものである。内を固めよ。しかして内の最も内は、各個人の心の内である。(徳富猪一郎「昭和國民讀本」ニ據ル)

東京市

高等小學讀本卷二終

高讀二

高等小學讀本卷二
臨時定價 金拾貳錢

昭和十五年六月廿四日 修正印刷
昭和十五年六月廿六日 翻刻印刷
昭和十五年七月廿四日 翻刻發行

著作權所有

著作兼發行

文 部 省

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社
兼印刷者 代表者 井 上 源 之 丞

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
印刷所 東京書籍株式會社工場

昭和十五年六月廿四日
文 部 省 檢 査 濟
日九廿月六年五十和昭

發行所

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社

高一

森田秋夫